下の通りである。

● 自国ＮＧＯとの共同出資型

ＮＧＯが自らに事業計画を作って実施するプロジェクトに資金をつけるというＮＧＯ支援型の援助方式で自国のＮＧＯとのマッチング方式を採用し、共同出資で事業を実施するもの。カナダ等が本形態を採用。

● 比国ＮＧＯ業務委託型

プロジェクトの基本的な計画は援助機関が作成し、途上国側援助実施機関（省庁等）が実施主体となり、援助国側のコンサルタンツ等が参加する。これらに、ＮＧＯが含まれるか、参加するか、又はフィリピンのＮＧＯを全面的にコンサルタンツと見なして業務委託を行うかの形態をとるもの。米国、ＥＵ等多数が本形態を採用。

● 資金援助型

援助資金を直接ＮＧＯに供与する形態のもの。日本の小規模無償資金協力、カナダのカナダファンド等がこれに当たる。日本、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、オランダ等が本形態を採用。

３．二国間援助機関－ＵＳＡＩＤ、ＣＩＤＡのＷＩＤ援助

（１） 各機関のフィリピンにおける取組

ａ．ＣＩＤＡ：カナダ国際開発庁

（ａ） フィリピンにおける援助方針

ＣＩＤＡ：カナダ国際開発庁は、1987年のアキノ政権樹立以来フィリピンに対して本格的な援助を始めた。活動は現地の組織／住民が行うべきであるとして現地及びカナダ国内（もしくは国際）のＮＧＯを活動の中心とする形を重視しており、ＣＩＤＡとしてはその活動への資金援助及び助言を行う形で関わっている（Hands off Management）。また、現地の計画運営能力の育成を通した人的資源の育成に力をいれており、カナダからの専門性が求められるのは、インフラ整備等の先進技術等、フィリピン国内では調達が難しい分野のみである。

フィリピンへの援助方針は、以下の９つのメカニズムで示されている。

1) コモディティの支援

構造調整プログラムに伴って起こりがちな貧困問題の緩和を図るために実施。農業生産拡大にかかわる肥料、保健状態の改善のためのワクチン、教育の充実に関係する紙等をフィリピン政府の要望にあわせて提供する支援。

2) 輸入支援

フィリピン政府の公共投資プログラムの支援として、キーとなるインフラ投資のための借款を行う。

3) 企業の育成

政府及び金融機関と協調しての、零細ならびに中小規模企業家への支援。長期的には比加国の企業間のパートナーシップがつくられることを期待している。

4) 政策、技術援助と訓練ファシリティ

Policy,Technical Assistance and Training Facility

研修、技術支援等を通し、政府（及び関連機関）の政策作成能力、資源の持続的な管理経営能力向上を支援する。

5) 地方政府支援プロジェクト

フィリピン政府の地方分権化に関連し、地方政府の行政能力向上を支援する。

6) カナダ基金（Canada Fund for Local Initiative)

大使館による小規模で短期間の地域開発及び貧困緩和のための収入創出、災害支援プロジェクト等への資金援助。

7) ＮＧＯ支援プロジェクト

カナダとフィリピンのＮＧＯの連携を通して実施されるプロジェクトで、ＮＧＯの計画運営能力向上を支援する。

8) ＷＩＤ Specific プロジェクト

ナショナルマシーナリーや女性グループあるいは、ＮＧＯの立案ならびにネットワーク能力向上支援等を行なっている。

9) 制度的なリンケージ Institutional Linkage

研究機関等、非営利機関による共同プロジェクト実施の促進。

ＣＩＤＡでは、援助の業務管理においても1989年から分権化を通して現地スタッフ、現地事務所の自立性を強める方針をとっている。現地スタッフはＨＱにおける研修を受け、ＣＩＤＡの活動の概要、流れを把握する。彼らは自分の専門性とともにプロジェクトマネジメントにおいても重要な責任をもっている。

（ｂ） ＷＩＤへの取り組みの戦略

上述の９つのメカニズムの中にも示されているように、ジェンダー／ＷＩＤ配慮は重要な役割を果たしており、プロジェクトの選定に関しても、プロジェクトの持続性、環境配慮等の視点の有無と並んでジェンダー配慮が指標の一つとされている。ＷＩＤ取組みの方針としては、

1) Integration（ＷＩＤに特化するよりは全計画へのジェンダーの視点の組み込みを）

2) Gender Training（援助関係者への啓蒙）
3) Systematic Monitoring（系統だったプロジェクトのモニタリングの仕組づくり）
4) Adovocacy（国民への啓蒙）
が重要視されており、プロジェクトの内容的には女性の伝統的ニーズ支援より、戦略的ニーズ型の協力を好ましく考えている。また、ＷＩＤの推進に当たっては、参加、住民自身による現状把握とモニタリングの重要性を重視している。

現在実施中のＷＩＤ関連のプロジェクトは以下のとおりである。

① ＷＩＤ Specific プロジェクト／プログラム

1) ＮＣＲＦＷ（ナショナルマシーナリー）Institutional Strengthening Project
ジェンダー研修開発及び実施を通しての各省庁の予算ならびに政策立案におけるジェンダーの視点の組み込み促進、ＮＣＲＦＷスタッフ及び各省庁担当官のスキル開発、カナダでの研修や教材開発等の支援を通して、ＮＣＲＦＷの能力の向上を図る。

2) ＷＩＤ－ＮＧＯ Umbrella Project
全国40の女性ＮＧＯを統括するＤＩＴＡＷＡ(Development Initiatives for Women's Alternative and Transformative Action)を通しての小規模プロジェクト資金供与による小規模かつ革新的な活動への支援を通して、女性のエンパワーメントを進める。

② ＷＩＤ Integrated プロジェクト／プログラム

1) Philippine Cooperative Development Assistance Program
両国の協同組合組織の協力関係を支援する。トレーニング、調査、アドバイス等を通して、フィリピンの協同組合の自立性確保支援とメンバーの社会経済状況の改善を図る。このプロジェクトでは女性及び青年の参加の確保が重視されている。

2) ＵＮＩＣＥＦ Area - Based Child Survival and Development Project
ネグロス、ミンダナオ、スルにおけるＵＮＩＣＥＦの活動（母子保健、農業関連活動、信用供与、水と衛生、教育、母親／教師へのトレーニング等）への資金援助。

3) Philippine Non-Fomal Education Project
地方及び都市における貧困層（非雇用青年、失業中の世帯主、女性の貸金労働者等）を対象としている。

4) Philippine ＮＧＯ Development Assistance Programme（ＰＤＡＰ）
カナダ及びフィリピンのＮＧＯの協力により、① 貧困グループ組織への協力を通しての貧困緩和及び自立支援、② カナダ国民への開発教育、③ 両国のＮＧＯのパートナーシップの育成、のコンポーネントで進められている、両国のＮＧＯ代表（それぞれＰＤＡＰ－カナダ、ＰＤＡＰ－フィリピンと呼ばれる）により運営されている。ＰＤ

ＡＰ－フィリピンは地元のＮＧＯのプロジェクトの活動を支援し、資金援助の審査、活動のモニタリング、評価を実施する。ＰＤＡＰ－カナダは、ＰＤＡＰ－フィリピンから送付されてきた資料を検討し、それぞれのＮＧＯが支援すべきプロジェクトを決定し、比国側のパートナーとの協調関係を形成していく。支援プロジェクトの選定基準には、女性の受益をチェックする項が含まれている。

5) Philippines-Canada Human Resource Development Programme（ＰＣＨＲＤ）

ＰＤＡＰと同様に、フィリピン及びカナダＮＧＯ代表の双方から成る委員会により運営されている。フィリピンＮＧＯへのトレーニング、啓蒙、コンサルテーション等を通して、ＮＧＯの運営能力を高め、貧困緩和に役立ち、また、政府の政策立案に対しても影響を持てるような力をつける。4)、5) におけるＣＩＤＡの役割は資金供与及びアドバイスである。

上記のほか、前述のカナダ基金、地方政府支援プログラム、企業の育成においても女性グループへの支援、ジェンダー配慮が行われている。

b．ＵＳＡＩＤ：アメリカ合衆国国際開発庁

（a） フィリピンにおける援助の方針

米国は旧宗主国であったという歴史的背景と米軍基地を有してきたという軍事的理由から、フィリピンの最も重要なドナー国の一つであった。しかし冷戦が終わり、1992年に上院で米比基地協定批准が否決された現在、フィリピンへの支援は縮小の方向にある。ＡＩＤの援助戦略における重要目標は以下のとおりである。

1) 経済の地方分散促進と地方への政治的偏見のない開発投資
2) 地方の発展、分散にに不可欠なインフラストラクチャーの整備
3) 政策的に緊要度の高い地域に的を絞った効率的なサービス
4) 天然資源（特に熱帯雨林と近海）の保全
5) 発展の妨げとなっている施策、制度の除去。

特に政策改善、民間企業の支援、中央集権の排除の３つのテーマに重点が置かれている。

米国の援助は、開発援助（ＤＡ）、PL480による食糧援助、1979年の改定軍事基地協定にリンクして80年から供与が開始された経済支持援助（ＥＳＦ）の３種類で実施されてきた。90年からは、対比多国間援助計画（ＭＡＩ）が加わっている。最貧層を受益者とするものに重点が置かれる経済支持援助は当初、２大米軍基地周辺の基本的なインフラ整備とそれによる雇用創出を図るものとされていた。しかし86年以降一部がフィリピン政府財政への補助としても活用できるようになり、農業、教育、衛生関連などの分野で、直接基地と結び付かない地域を対象とする事業もおこなわれるようになった。

（b） ＷＩＤへの取り組み・

ＡＩＤでも、これまでのＷＩＤスペシフィックアプローチから、全てのプロジェクトがジェンダーの視点を持って計画されるようにする Gender integration＝Mainstreamingへと視点を変えてきている。特に、プロジェクト計画実施において、まず地域の状況を把握するためのベースライン調査の重要性があげられており、その手法、ツールの開発が行われている。

（２） ＣＩＤＡ、ＵＳＡＩＤに見るＷＩＤ、地域開発手法

両機関のＷＩＤ、地域開発の方針の概観をこれまで述べてきたが、その中で参考になると思われる３点について、もう少し詳しく述べておく。

ａ．ジェンダー／社会分析手法

（ａ） 調査手法

両機関とも、プロジェクトの計画、実施における地域の現状把握の重要性を認め、ジェンダー／社会分析の手法の開発に取り組んでいる。特に、外部者による調査ではなく、地域住民自身による分析手法（住民参加型手法）が、より重要であるとしている。両機関がプロジェクト関係者や開発コンサルタントのために作成したジェンダー／社会分析のハンドブックから、調査手法を以下に簡単に紹介する。

ＣＩＤＡのハンドブックでは、社会／ジェンダー分析は、１）プロジェクトにおける社会の中で不利な状態におかれているグループの受益の確保及び、２）活動が社会的持続性をもつために必要であると位置づけている。そこで、

1) 社会的弱者集団の同定、（社会的弱者の現状把握、彼らを社会的弱者たらしめている社会的文脈、社会構造の歴史的変化と近年の傾向の把握）
2) その集団内の多様性の把握
3) 社会的に不利な状況を引き起こしている主要な要因は何か、他のグループはそれをどのように対処しているのか
4) 社会的に不利の状態を打破するための資源、機構等、どのような変化が必要とされているのか、というプロセスで進んでいくものとしている。

具体的には、社会の中の階級とジェンダーに視点をおきながら、生産におけるインプットのコントロール及び、アウトプットの消費または分配における力関係の把握として捉えられている。具体的にＡＩＤが指標として呈示している項目は、

・誰が何をしているか（活動）
・誰がどれだけ稼いでいるか（収入）

・誰がどのように支出しているか（支出）
・資源（土地、資本、技術）へのアクセス及びコントロールはどのようになっているか、
・抑制要因と機会（時には女性が機会を得ることが女性の二重労働につながってきてしまうこともある）
・上記の指標の季節的な変動の把握、である。

ＣＩＤＡのハンドブックには、従来の調査法に加えＲＲＡ（ Rapid Rural Appraisal）と参加型調査法が紹介されている。ＲＲＡは、従来の調査法の実用性の低さを、合目的的な情報選択により最適化、短期化することにより高めようとするものであり、専門を越えた、学際的なアプローチが有効とされている（例：Sondeo Approach）。参加型調査法は住民自身によるデータ収集と分析の手法であり、住民自身による計画、実施、評価の各段階へとつながっていくものである。

実際の調査のツールとしては、以下のようなものが紹介されている。

1）地域の概観把握
　社会階層把握(Wealth Ranking)、地域資源地図づくり(Gender Resource Mapping)
2）住民の活動
　ジェンダー別活動暦、参与観察、ライフ・ヒストリー（女性の生涯史調査）
3）地域の変化
　ライフ・ヒストリー（物的生活の状況等の変化）
4）地域住民への聞き取り
　世帯詳細調査、キーインフォーマント、グループ討論
5）地域の敏感な話題
　投影的翻訳的現状把握（写真、ゲーム等を通しての現状把握）
6）直接の質問が困難な話題
　Content Analysis、参与観察
7）詳細調査
　事例研究
8）質問票による調査

この他に、ＡＩＤのツールブックにはジェンダー・センシティブ・モニタリングと評価の手法が紹介されている。

（b） プロジェクトサイクルへの組み入れ

ＣＩＤＡでは、まず計画段階初期の事前調査をもとにプロジェクトでの女性の役割、女性の参加促進に関するデータを収集分析し、文書に記載することが求められている。その後フィージビリティ調査が派遣され、男女によって構成されたチームが男女別のデータを収集分析する。この結果をもとに、ＣＩＤＡ内部承認文書及び両国の合意による実施計画書において、より詳しく計画段階におけるジェンダー配慮が記載されていくことになる。また評価においても、社会／ジェンダー分析が実施される。

ＡＩＤにおいては、ジェンダーの組み込みは３つのステップで表されており、ステップ１として男女の責任と役割の相違の把握、２としてジェンダーによる制約要因と機会を把握する、という簡易なジェンダー分析（gender analysis map）が組み込まれている。最後のステップ３が、これらのデータをもとに、実際のプロジェクトへ応用していくことであり、プロジェクト計画の様々な段階の文書に、ジェンダー配慮の項を作ることが提案されている。

ジェンダー／社会分析の実施は重要であるが、それがプロジェクトのサイクルに組み込まれ、活用されていくようなシステムがなくては、分析自体、意味がないものとなってしまう。単なる記載の強制では形骸化してしまうという危惧もあるが、要所要所でリマインドすることは重要であろう。

ｂ．地域組織との関係

フィリピン政府の地方分権化との関係および、住民の参加、持続的な開発へ重点をおいている点から、地方自治体や地域ＮＧＯとの連携の重要性が両機関ともに増している。

（ａ） 地方自治体への支援

ＡＩＤは個々のプロジェクトにおいて地方政府と協力して実施している程度であるが、ＣＩＤＡでは地方政府支援プロジェクトを通し、地方政府の行政能力の向上に協力している。この地方政府支援プロジェクトは、政府フィールドスタッフや住民組織／ＮＧＯへの地方政府の管理能力を高めることを目的としている。地方政府は財政的に困窮していることが多いが、コモディティ支援プログラムによって得た物資を現金化することにより開発基金とし、それを活用できるようにしている。カナダ人専門家は、地方政府スタッフの計画・実施能力の向上のためのアドバイス役となる。具体的には政策立案の支援、トレニング実施、いくつかの地域でのプロジェクトの支援を行っている。

（b） 地域住民組織、ＮＧＯとの関係

ＣＩＤＡ、ＡＩＤともに、地域住民／現地ＮＧＯの主体的な参加を重視している。フィリピンのＮＧＯは前述のとおり、各レベルに階層化されており、最上層のアンブレラＮＧＯは規模も大きく安定している。また、フィリピン政府がドナー機関によるＮＧＯへの支援に協力的であることも支援を容易にしている。1993年では、ＣＩＤＡ予算の約35％、ＡＩＤ予算の約25％がＮＧＯに振り分けられている。

プロジェクトに地域住民が主体的に参加していくための手法として、ＡＩＤでは事前からの Baseline Survey の実施と共に、Social Preparation （地域の準備体制づくり）を重視している。Social Preparation とは住民が開発プロジェクトを受け入れ、主体的に実施していくための意識啓蒙であり、具体的には全期間を通しての地域のリーダー／政府職員及び地域住民との対話（必要であれば男女分かれての意見交換）等がおこなわれる。

ｃ．具体的なＮＧＯとの連携手法

上述したように、両機関とも現地（ 及び国内 ）のＮＧＯとの連携に力を入れている。これまでの経験の中で、どのような手法を現在とるようになっているか、概要を紹介する。

（ａ） ＮＧＯとの関係（ＮＧＯ支援の形態）

これまでＣＩＤＡではＮＧＯへの資金援助は個々のプログラム／プロジェクトの内容を評価し、資金供与を判断する形をとってきた。しかし94年4月からは、一歩進んで、Institutional Funding が開始されることになっている。このスキームでは、問われるのは組織の計画運営能力であり、資金援助が認めらると、資金の運営については組織に一任される。ＣＩＤＡは仲介者／助言者であり、実際の開発は一般市民や民間セクターによって担われるべきであるとの理念が、この新しいスキームではよりはっきりと表されている。ＣＩＤＡは支援を通して両国のＮＧＯ及びＣＩＤＡに（成功、不成功を問わず）経験が共有／蓄積されること、カナダ国民の国際理解がより高まっていくことが重要であると考えており、特にカナダのＮＧＯに対しては国民への開発教育／啓蒙活動の推進を望んでいる。

また、資金援助の基本は Cost-Sharing であり、資金援助を受ける側も、ある程度の費用を自己負担すべきであるというものである。ＮＧＯへの資金援助スキームでは、最低25％は組織自身が負担しなければならないことになっている（カナダ大使館が個別に実施しているカナダ基金は、大使館の責任のもとに直接の選定によって現地ＮＧＯの実施するプロジェクトへ資金援助するものであり、上記の形態とは性格を異にしている）。

ＡＩＤでは、地域開発の中心的な担い手として現地ＮＧＯが位置づけられており、特に社会的に不利な位置にある住民に届くためには、彼らを通すことが重要であると考えている。フィリピンでは ＰＶＯ Co-Financing Project と Enterprise in Communnity Development の２つのＮＧＯ支援プロジェクトがある。前者は現地のＮＧＯを対象とした資金援助プログラムであり、後者は民間企業による地域開発活動を支援している。ＡＩＤはＮＧＯからの申請の審査、モニタリング及び評価を実施する。

以上、これら２機関とＮＧＯの関係を比較すると、ＣＩＤＡでは現地及び加国のＮＧＯの連携を重視し、ＮＧＯの独立性が強いのに比べ、ＡＩＤと現地ＮＧＯは資金供与を通じてより強く関係を結んでいるということができよう。

（ｂ） プロジェクト／ＮＧＯの選定

ＣＩＤＡのＰＰＡＰ及びＡＩＤのＰＶＯ Co-Financing Project の申請ガイドライン及びフォーマットを参考にどのような観点が援助の選定の指標として捉えられているかを述べたい。

双方に共通に挙げられているのは、プロジェクトの背景及び問題点、プロジェクト地域の基礎的データ、プロジェクト概要及び目標、プロジェクトの自然環境／社会環境／持続性配慮、プロジェクトのモニタリングと評価のシステム、予算である。これらは、プロジェクトの大筋を把握するために必要な事項である。

その他の点でいくつかの相違点が見られている。第１には、ジェンダー／ＷＩＤ配慮の捉え方である。ＡＩＤでは、プロジェクトの分析において社会的適合性が問われているが、ガイドラインのどの部分にもジェンダー／ＷＩＤの記載は指示されていない。これに対して、ＣＩＤＡではフォーマットの各所（参加者分析、フィリピンパートナーのジェンダー理解、プロジェクト運営、評価）にジェンダー配慮の記載が求められており、申請書作成作業を通してジェンダーがリマインドされる形式となっている。

第２には、プロジェクトの受益者への記載である。ＡＩＤはプロジェクト地域の基礎的データの中に受益者の果たすべき役割及び参加の項を設けているに過ぎないが、ＣＩＤＡでは地域住民の参加という独立した項で参加グループの特徴、組織自身の参加の意識が細かく問われている。ＡＩＤとは反対に、参加者及び彼らを取り巻く地域の分析という方向から、プロジェクト地域の概要が映し出されるような項目だてになっている。

第３には、これは各機関のスキームの違いからくるものだが、ＡＩＤの支援スキームに申請するには、現地ＮＧＯはＡＩＤのＰＶＯ登録リストに登録している必要がある。ＡＩＤが協力するＮＧＯは、ＡＩＤが直接登録管理するようになっているのである。

第４にＡＩＤでは、プロジェクトの妥当性、持続性を測るためのプロジェクト分析が重要な項目であるのと反対に、ＣＩＤＡではプロジェクトの期待されるアウトプット、効果に関して詳細な説明が求められている。具体的には、ＡＩＤでは１）財務／経済分析、２）技術力分析、３）社会適合性分析、４）事務管理能力分析、５）環境影響分析からプロポーザルの妥当性の分析に努めている。一方ＣＩＤＡでは、参加者の意識啓蒙、組織の企画運営能力の開発、ジェンダーの公平性の促進、参加者の生活の質の向上といった、より人道的で踏み込んだ内容がアウトプットとしてどのように期待されるかを検討するように指示されている。

全体的に、ＡＩＤは客観的な指標としてＮＧＯのプロジェクト運営管理能力の評価を重視しているように見受けられる。これは、ＣＩＤＡのスキームのように現地のＮＧＯの代表体が支援プロジェクト／ＮＧＯを選定するのと異なり、援助機関であるＡＩＤが直接選定しなければならないということから来るものであるかもしれない。

最後に、ＣＩＤＡが新しく始めようとしている Institutional Funding の指標を紹介する。このスキームは組織の財政／経営／技術的容量を幅広く評価するものであり、その実施の参考となるガイドでは次のような評価指標が挙げられている。

① 組織の同定
　組織の目標、活動基盤、開発教育／広報活動、他機関との連携、政策の分析能力、（国外に本部を持つ場合）カナダにおける独自性

② 組織運営能力
　組織の支持基盤、運営、意思決定の方法（透明性、民主性）、事務／予算管理システム

③ プログラム計画能力
　明確な方針／基準の有無、持続性、相手国パートナーの概要及び協調体制、ジェンダー／環境／人権配慮

④ プログラム実施運営能力
　運営能力、技術的／専門的知識、モニタリング／評価システム、報告システム

⑤ 財政的安定性

４．多国間援助機関－ＵＮＩＦＥＭ／ＵＮＤＰ、ＦＡＯのＷＩＤ援助

（１） 各機関のフィリピンにおける取組

ａ．ＵＮＩＦＥＭ：国連婦人開発基金（ＵＮＤＰ：国連開発局）

（ａ） フィリピンにおける援助方針

ＵＮＤＰでは、これまでの技術重視から人的資源の開発に重点を移しつつある。政府の開発計画に沿って作られた第５次５ヵ年計画（1993～98）では、４つの柱と３つのレベルとして、援助の方針が述べられている。

４つの柱とは、以下の点を指す。

① 経済改革
② 技術移転（比較優位分野において国際競争力をつける）
③ 環境と天然資源（政策面でのアドバイス）
④ 貧困緩和

また、３つのレベルとは以下の３点を指す。

① 政策レベル
② 知的能力構築 Capacity Building
③ 実施レベル

（ｂ） ＷＩＤへの取組み

ＵＮＩＦＥＭ／ＵＮＤＰはＮＣＲＦＷへの協力をとおしてＷＩＤに取り組んでいる。これまでもＷＩＤに関するプロジェクトのチェックリストを用いてＷＩＤ配慮を推進してきたが、今年度からはチェックリストだけでは表れない、より内容的につっこんだフォローをする事を検討している。

具体的なプロジェクトとしては、現在４つのプロジェクトに対して資金援助を行っている。このうち３つが収入創出活動であり、資金要請をしてくるプロジェクト全体を見ても収入創出活動をメインとしたものが多い。

収入創出プロジェクトを進めていくにあたって、いくつかの問題点が共通して見られている。ＵＮＩＦＥＭスタッフからの聞き取り及び、現在実施中の「農村女性による根茎作物生産・加工・流通プロジェクト」の中間評価報告書を参考にまとめてみる。このプロジェクトは、農業省農業普及局の指導のもとで、ＮＧＯである Rural Improvement Club が実施している農村女性の収入創出活動をメインとした生計向上活動である。

プロジェクト推進における一番大きい問題点がマーケッティングの確保である。特に遠隔地において、地域市場の小ささと外部市場へのアクセスの悪さによる輸送能力の低さが問題となっている。これに対して、評価報告書では流通活動への支援が期待できる他の組織との連携が提案されている。また、外部市場のニーズに応えられるような品質確1保の問題もあげられている。

次の問題点は参加者の活動のマネージメント能力である。女性は収入創出活動を Extra Workと捉えがちであり、これには女性のインセンティブと自分からの投資が必要である。しかし、確かにこれは女性の仕事をより多くすることになりがちである。収入向上に伴って女性の労働の二重負荷は解決していく部分もあるが、加えて、女性達が自分達の果たしてきた役割の重要性を認識できるようなジェンダー研修プログラムの実施が重要となる。

第3が農村人口の流出の問題である。訓練した技術の流出を防ぐために、村を出ていってしまう可能性の高い未婚若年女性でなく、中壮年の女性を対象としたトレーニングをしていくことが進められている。また反対に、これらの農村における所得創出プロジェクトは、女性が既存の農産物を、農村において、都市の企業に頼らずにどのように商品化していけるかを示す開発モデルとなる可能性がある。農村地域での急激な都市化による農村生活の大きな変化をいかに効果的に管理していくかによって、農村女性が事業の中心的推進者となるか、経済的疎外者となるかが決まることとなる、と評価報告書はまとめている。

b．ＦＡＯ：国連食糧農業機関

（a） フィリピンにおける援助方針

1993年6月末時点で、ＦＡＯはフィリピン国内のみで19、東南アジア、もしくはそれ以上の広い範囲をまたがるプロジェクトとして、21のプロジェクトをフィリピンで実施している。プロジェクトはＵＮＤＰ資金によるプログラム、ＦＡＯの自己資金による技術協力プログラム、及びその他の機関からの信託基金（Trust Fund）によるプロジェクトの3種類に大別されている。フィリピンで実施されているプロジェクトを概観すると、前2者はココヤシの病虫害、蚕生産とアグロインダストリー、家畜保健センター、海藻生産といった、農林水産業の技術面の支援プロジェクトが多い。信託資金プロジェクトは現在ＵＮＦＰＡ（国連人口活動基金）の資金による家族計画と絡ませてのプロジェクトが複数進行している。

（b） ＷＩＤへの取組み

ＦＡＯは、フィリピンにおいては特にジェンダーに関する Strategy を持っていない。

また、住民参加型プロジェクト（People's Participation Programme）もフィリピンでは行なっていない。しかし実際のプロジェクトを進めるにあたって農村女性の活動に関するデータが不足しているという問題点を感じている。ＷＩＤ関連のプロジェクトとしては、ＵＮＦＰＡ出資による「小規模漁村コミュニティにおける貧困女性の地位向上プロジェクト」が実施されている。

前述のＵＮＦＰＡ出資によるプロジェクトは、家族計画とその根底にある収入増加の必要性を絡ませたもので、地方政府が受け皿となって実施している。女性たちのグループを組織し、そのグループが中心となって活動していく形を取っている。プロジェクトは、トレーニングとローン＆貯蓄のスキームからなっており、水産関係及びそれ以外の分野についても支援する。分野としては、水産物加工流通、養殖法、塩生産、貝殻細工、日用品流通、米流通、養豚、手工芸等にわたっている。1993年に実施された中間評価によると、家族計画の普及は予想したほどではなかったが、女性の収入の向上（家計における女性の収入の比重の上昇）及びそれに伴う家庭内での、また社会的な女性の地位、発言権の上昇が認められている。

（２） ＷＩＤ配慮プロジェクトのモニタリング及び評価手法（ＵＮＩＦＥＭ、ＦＡＯ）

ＵＮＩＦＥＭの支援による農村女性による根茎作物生産・加工・流通プロジェクトの評価報告書及びＵＮＦＰＡ出資によるＦＡＯの小規模漁村コミュニティにおける貧困女性の地位向上プロジェクトのインパクト調査報告書をもとにどのような視点が評価の指標となっているかを紹介する。プロジェクトの概要と結果は上記に簡単に述べてある。

ａ．モニタリング／評価の位置づけ

両プロジェクトとも評価は、外部のコンサルタントに依頼して実施している。プロジェクト評価について、ＵＮＩＦＥＭは単にプロジェクト実施者、受益者のためだけでなく、実施機関、関係機関に豊富なアイデアを提供するという効果をもたらすと位置づけている。そこで、関連プロジェクト間で共通の評価事項、目的を設け、プロジェクトの経験を一般化する作業も行っている。

ＦＡＯのプロジェクト評価は、女性へのインパクトの測定及び家族計画受容との相関が重視されたため女性たちの経済・社会的変化をできるだけ客観的な指標で提示することを目的としている。一方、ＵＮＩＦＥＭのプロジェクトは、上記のような変化の把握も当然ながら、プロジェクトの開発アプローチの是非（中心プロジェクト及び補助プロジェクトの展望と持続性、受益者の女性たちによる参加の現状、より拡大していくための戦略、地域社会／マクロ経済との関係性等）も同様に問われている。ＵＮＩＦＥＭは、その資金提

供の意味が、小規模で革新的なプロジェクトを支援することにより、Break Through を目指すものであるためこのような比重の置き方は当然であるといえよう。

b．調査手法

調査手法において、ＦＡＯプロジェクトでは、参加女性の約 30 ％（ 157人）を選び、回想法によるインタビュー調査を実施している。プロジェクトのインパクトを正確に測定するには実施前に対照グループを設定し、時系的に相違を測定していくのが正攻法であるが、予算／人員／時間的制約から、上記のような参加女性の心象、反応を測ることによる判定的な手法をとったとしている。プロジェクト関係者はこの調査には直接的には関与していず、インタビューのコーディネーション等に関わっている。ＵＮＩＦＥＭプロジェクトでは、全体の参加者が少ない（ 198人）こともあり、コンタクトできた全ての参加者（ 140人）への個別調査をおこなっているようである（インタビュー方式か調査票記入方式かは不明）。その他に、プロジェクトスタッフへのインタビュー、またビデオカメラを使用し活動状況を映像化することにより、外部者へのプロジェクトのイメージ作りを図っている。

c．調査項目

調査の内容としては収入、技術、信用へのアクセス、貯蓄性向の変化といったプロジェクトによる直接的な効果の指標と共に、自分の意識における、また社会における自身の地位の変化の項目がＦＡＯのプロジェクトでは取り上げられている。一方、ＵＮＩＦＥＭプロジェクトでは、所得創出活動の持続性に影響を与える重要な要因として、資源（土地）へのアクセスとコントロールの現状、及び家族内における労働の分担及び共同の状況を調査し、考察を加えている。社会的な状況の変化のような抽象的な内容については、前もって挙げられた項目に対する点数評価と共に自由回答によって、女性たちの自分自身への信頼、社会的移動性、家族内／近隣社会／地域社会における地位等の変化を記述してもらうことにより、自分たちで変化をどのように評価しているかが表われるようにしている。

注

1) 国際協力事業団,1992,集団研修 「農家生活水準向上女性指導者コース」、カントリーレポート　参照。
2) 国際協力事業団,1992、前掲書　参照。
3) ASIAN DEVELOPMENT BANK, 1988, WOMEN IN DEVELOPMENT : PHILIPPINES, COUNTRY BRIEFING PAPER　参照。
4) ASIAN DEVELOPMENT BANK, 1988、前掲書　参照。

5) ASIAN DEVELOPMENT BANK, 1988、前掲書　参照。

6) アジア・稲作　技術マニュアル（応用編）1990年２月，農業改良普及協会　参照 AGRICULTURAL TRAINING INSTITUTE(PHILIPPINE),1992, CORPORATE PLAN 1993-1998 参照。

7) アジア・稲作　技術マニュアル（応用編）1990年　前掲書参照。 AGRICULTURAL T

RAINING INSTITUTE(PHILIPPINE),1992 前掲書参照。

8) 崎坂香屋子,1994.4.18,フィリピンのＮＧＯ（改定版）,JICAフィリピン事務所,参照。(財)国際協力推進協会 1990.3.、わが国におけるＮＧＯ活動の発展に資するための調査研究　参照。

9) 国際協力事業団,1992、前掲書　参照。RIC,1984,THE RIC HOME EXTENSION STORY, PUBLISHED BY THE RURAL IMPROVEMENT CLUBS OF THE PHILIPPINES 参照。

10) 崎坂香屋子,1994、前掲書　参照。

11) 崎坂香屋子,1994、前掲書　参照。

12) ＮＧＯについては、先にもふれたように、ＰＯ（People's Organization）、ＰＶＯ（ Private Voluntary Organization ）等の呼び名もある。ＰＯは地域住民レベルの第一次的な住民組織、ＮＧＯとは専門性を持った組織を指す。一方ＰＶＯはＡＩＤが独自に定した分類である。ここでは混乱のないように基本的にＮＧＯに統一する。

13) 現在ＪＩＣＡ国際協力総合研修所においても、ＮＧＯとの連携に関する調査研究が行われているので、その報告書がより詳しい内容を提供できるものと思われる。

参考資料

(1)　ＣＩＤＡ

・Canadian Development Cooperation in Asia:Philippines. Asia Branch.CIDA.1991.
・CIDA in the Philippines: A Guide to Operational Projects.1993.
・Philippine Development Assistance Programme. Fact Sheets.年不明
・Philippine-Canada Human Resource Development Program.年不明
・Guide to Bilateral Operational Policies and Procedures.1991.
・Guide for conducting Institutional Assessments (Draft) .年不明
・PDHRD Project Proposal Format.
・Institutional Funding (Draft) .1993.
・NGO Division:Introduction and Guide.1986.
・Canadian Partnership Branch:Integrating Change.1993.
・Cost-sharing Policy Framework.1993.
・A Handbook for Social/Gender Analysis.1992.

(2) USAID
・Tools of Gender Analysis : A Guide to Field Methods for Bringing Gender into Sustainable Resource Management.1993.
・Engendering Development Asia and the Near East:A Sourcebook.1992.
・USAID's Gender Infomation Framework and Gender Analysis Case Examples.
・Partrership in Development:A PVO Network for Sustainable Development.1992.
・List of Registered Private Voluntary Organization(PVOs)with USAID/Philippines/1993.
・PVO Registration Guidelines and Project Proposal Format.年不明
・Sustainable Community Development : A Challenge to Corporate Social Responsibility in the'90s.
・List of Registered Enterprise in Community Development (ECD) with USAID/Philippines.1993.
・ECD Co-Financing Program : Certificaiton Guidelines and Project Proposal Format.年不明
(3) UNDP/UNIFEM
・現在進行中の4つのプロジェクト概要
・Annual Report 1992
・マリンドゥケにおけるroot crop production projectの評価報告書
(4) FAO
・The Philippines FAO Assisted Operational projects
・An Initial Assessment of Project Impact on Selected PHI/89/P16.Women Focussing on Specific Economic and Social Gains. (Improving the Status of Disadvantaged Women in Small Scale Fishing Communities of Capiz and Pangasinan の評価報告書)
(5) その他
・Rapid Rural Appraisal:Proceedings of the 1985 International Conference. Rural Systems and Farming Systems Research Projects. Khonkaen University.1987.
・企画調査員定期報告書（1993年9月～12月）.崎坂香屋子.JICAフィリピン事務所.1993.
・WID配慮における社会/ジェンダー分析手法調査（ドラフト）.国際協力事業団.1993.
・JICAとNGOの連携（ドラフト）.国際協力総合研修所.国際協力事業団.1994.

Ⅲ　フィリピンの女性と農村開発

本章では、対象国、フィリピンの女性を中心とした社会、経済状況を背景に事例となったマリンドゥケ島とボホール島の農村女性の生活状況と開発に関わる参加状況を概観する。

1．フィリピンの農村女性

フィリピン女性に関する現在の社会、経済、文化的な一般的状況についてフィリピン女性の役割に関する国家委員会がまとめた資料、『フィリピン女性の統計』（以下、「女性統計」と略す）から概括する。

フィリピン女性はアジアの他の国々の状況からみて特徴ある状況がうかがえる。1975年国際婦人年以降、男女機会均等の施策が進行して、あるゆる場面に女性が目覚ましい進出がある一方、女性が旧態依然としたなかにとじ込まれている状況が存在するという認識がある。たとえば教育や経済追及の場面や政治的活動、社会活動の分野では明らかに機会均等が浸透しだしてきている。しかしながら、女性の経済分野への進出については男性の後背に甘んじているというのがフィリピンＷＩＤ関係者の見方である。

（1）　人口統計を中心にみたフィリピン女性の概況

1990年のフィリピンの人口は、6,070万人である。そのうち女性は、3,020万人で 49.8%で男性より若干少ない。フィリピンの70年の人口は3,670万人であり、60～70年の人口の年平均人口増加率は3.08%であるのに対して80～90年は2.35%に低下してきている。

出生率は、明らかに低下の方向にあり、1965年に１夫婦当り平均６人強だったものが1985年には、４人に減少している。これによって若年層人口増加をとどまらせて、性別年齢別によるピラミッド型から釣鐘型への移行を示すことになった。

平均余命は、1990年に男性が62.8歳であるのに対して、女性は66.4歳と 3.6歳長命になっている。これに関連して高齢者人口は1980年に 160万人だったのが10年後の1990年には 210万人に増えている。1980年では男女の差はほぼ等しかったが、1990年では女性が高齢者人口の54%を占めるようになった。

（2）　女性を中心とする社会構造全般の著述

フィリピン女性の生活上の問題として特質すべき点は、男性と比較して若い女性が農村から都市へ、海外へと出国する割合が高いことがあげられる。

a．都市への人口移動

フィリピン女性の都市へ移動は顕著であり、その中心は若年層(15～24歳の年齢層)が圧倒的である。性別年齢層別国内移動人口をみると35～44歳層を除いてそれ以外の年齢層で男性を上回っている。特に15～24歳の年齢層では男女合計の値で見ると農村から都市への移動人口の4分の1であり、それは女性の移動人口のおおよそ半分に当る。1983年から1988年の間に40万6千人の女性が農村部から都市部へ移動している。男性はこの間に 21万8千人である。移動する女性は、既婚者よりも独身者で両者の差は18.9ポイントを示す。ちなみに男性は、5ポイントにすぎない。農村部から都市部へのいわゆる向都人口は、一般に高校卒以上のものが多くを占めており、大学等の高等教育機関への進学者も含まれている。

農村から都市への移動を要因別に調査した結果を見れば、農村居住者は、就業機会やよりよい生活条件にひかれる意識があると考えられており、男女双方とも都市に移動している。都市部での仕事探しは別として女性は帰郷あるいは婚姻といった家族関係の理由を12.3%のものがあげている。農村部出身者の女性の大部分は、学生になるかまたは都市へ転出する以前に契約した無報酬仕事に従事している。一方、男性は、都市に出る以前に農作業労働者になるのが主たるものである。

b．海外への女性の移住（出稼ぎ）

1988年から1990年かけて17万7千人の海外移民があり、その約6割が女性である。1990年時点だけ見ても約6割が女性の移民である。それも男性に比べて若年層が多いことが大きな特徴である。海外への移住者で未婚者は男性で約45%、女性は約50%とわずかな差で女性が多くあり、既婚者では女性が男性を約2倍くらい上回っている。このような現象をどのように解釈しているのか、手元の資料では判断がつかない。

既婚女性が海外移住（出稼ぎ）にでる背景には、フィリピンの家族構造や親族組織がかかわっている。1985年の「女性統計」では、夫婦家族タイプ(Single Family)と拡大家族タイプ(Extended Family)、非親族世帯タイプ(Nonrelated Members)に大きく分けた場合、夫婦家族タイプは全体の4分の3(75.3%)を占めている。また、拡大家族タイプは23.9%である。1985年では男性世帯主の世帯で夫婦家族タイプは77.9%で拡大家族タイプが21.9%である。しかしながら、女性世帯主では夫婦家族タイプは59.3%で拡大家族タイプは40.4%になる。詳細な家族に関する統計がないので不明な点が多いが、一般に夫婦が複数同居するタイプの拡大家族は全体的に少ない。女性世帯主も他の途上国などと比較しても少ないが、女性世帯主の家族に拡大家族タイプの割合が高いことは女性世帯主に多くの親族が依存する傾向があるようにうかがえる。

しかしながら、世帯員規模を「女性統計」からみてみると140万といわれる女性世帯主の58.5%が4人以下の小規模な世帯になっている。子供を1人から2人を抱えたと考えられ

る日本でいうところの母子家庭が多くあることが推定される。また、1人住まいの単独世帯(single-persons household)では、女性世帯主全体の 8.8%に相当し、男性のそれはわずかに1.2%でしかすぎない。

(3) フィリピン女性の一般的状況と農村部の女性を中心とする生活状況

a. 労働力としての女性

以上のように、農村部から都市部へ、そして高学歴者は海外へと主に収入を求めて出稼ぎに女性たちが出る。国内では、女性たちが労働力として参入できる割合は、男性の80%と比べて女性は50%前後にとどまっている。しかしながら、女性の高等教育終了者は多く、学位取得者は男が 2.8%であるのに対して女は 3.8%である。このことが反映して政府などの公的機関への就業は、女性が52%を占めている。女性がこれ以外に進出している場面は、農業等自営業の賃金をもらっていない家族労働者でこの半分は農業者である。また、卸小売業といった流通関係、地域や社会、個人のサービス的仕事では女性が独壇場に近い状況を示す。全般に男性は収入のある仕事に従事していることが多いが、女性は収入が伴う仕事の割合が低い。

b. 隠れた場面での女性の進出

以上の傾向は、同報告でみる限り、表面にでない影の仕事への女性の進出を物語っている。めざましい女性の進出がみられるもうひとつの場面は、犯罪行為ににおける女性の進出である。かつては男性の独壇場であったのだが、近年特に多くなってきている。女性が男性を凌ぐのが海外での不法就労や窃盗である。そして、増加が著しいのは売春、不法占拠といった男性に強いられた犯罪の犠牲者としての性格である。

フィリピンの家族構造について人類学的な位置づけは双系的な特徴をもつ社会であるといわれている。その社会は、多民族社会であり、多様な形態が存在しており、一般的に女性が家族や親族をささえていく役割は概して高いようである。女性が伝統的な役割を担い、産業化していく社会の中での不適応現象が不均衡に生じ、その多くの負担が女性に、特に農村部女性に集中的に表れているとみることができる。

全般的な女性の都市へあるいは産業立国への出稼ぎといった女性の高学歴化に伴った動きの中で女性の就業構造の不均衡、その根本に横たわる農村部の経済的な条件を含めた生活様式の貧困ともいうべき状況がこの「女性統計」からうかがえる。フィリピンは他のアセンアン諸国と同様に急速に工業立国、産業立国の国家として成長しつつある。その背後を支える農村部の貧困状態が女性のめぐる形式的な人口統計に姿となって垣間みることができる。

2．女性対象の農村開発事例と農業、農村生活（1）ーマリンドゥケ

（1）　マリンドゥケ州の概況

マリンドゥケは総面積 92,203 haの小さなハート形の島である。ルソン島南部のケソン州の海岸に面している。南側はシブヤン海、南西にミンドロ島が位置する。

首都マニラからは早朝の飛行機の便（1日1往復）があり、わずか40分で到着する。このためマニラに非常に近いともいえるが、反面、都市化の流入の影響が顕著に見られるわけではない。「とても近いが、また、とても遠い」と現在のマリンドゥケの経済社会状況はこんな言葉で言い表される。

州の空港は、州都ボアクから数キロ離れたガサンにある。空港に到着して最初に感じる町の印象は、その牧歌的なのどかさである。幹線道路はコンクリートかアスファルトで舗装されているが、車の往来は少なく、手入れの行き届いた民家の庭には花々が咲きほこっている。車なら半日もあれば島を一周できる。マリンドゥケの風景からも、接した住民の感じからも、平穏で秩序ある島という印象が終始感じられた。

マリンドゥケの経済は、鉱山会社や漁業・林業も若干あるが、主に農業が中心となっている。州内には地主の所有する大きなココナツ・プランテーションと水田がある。州レベルでの収入は、ココナツ30%、米15～20%、根茎作物10～15%であり、農業生産による収入が約75%を占める。

マリンドゥケ州政府は、産業政策として、農業生産や、漁業と林業の開発、それに鉱業の促進を引きつづき図る一方、外部の市場向けの生産に力を入れはじめている。特に手工芸品生産、観光事業サービス、贈答品や家庭用品の製造に注目している。

現在の州知事 Luisito M.Reyes は、日本の企業で働いていた経歴を持つ。観光事業として、エレファント島に日本の資本によってリゾートホテルが建設されている。また、マリンドゥケ島では北部を中心に、ＪＩＣＡのプロジェクト（マリンドゥケ農業総合開発計画）によって潅漑用のダムと水路および上水道施設などが建設中である。

マリンドゥケといえば、文化の面ではモリオネスが有名である。モリオネスは、一般にはモリオネス祭として知られ、毎年マリンドゥケ島だけで行われる「イエスの受難と復活」をテーマにした宗教劇の一種である。スペイン文化の影響が残る祭であり、1807年から継承されてきたといわれている。四旬節の聖週間に、カラフルな木製の仮面と衣裳をつけた男たちが町全体を舞台に一連のパーフォーマンスを繰り広げ、それを見物に、外国や国内から何千人もの観光客がこの島を訪れる。

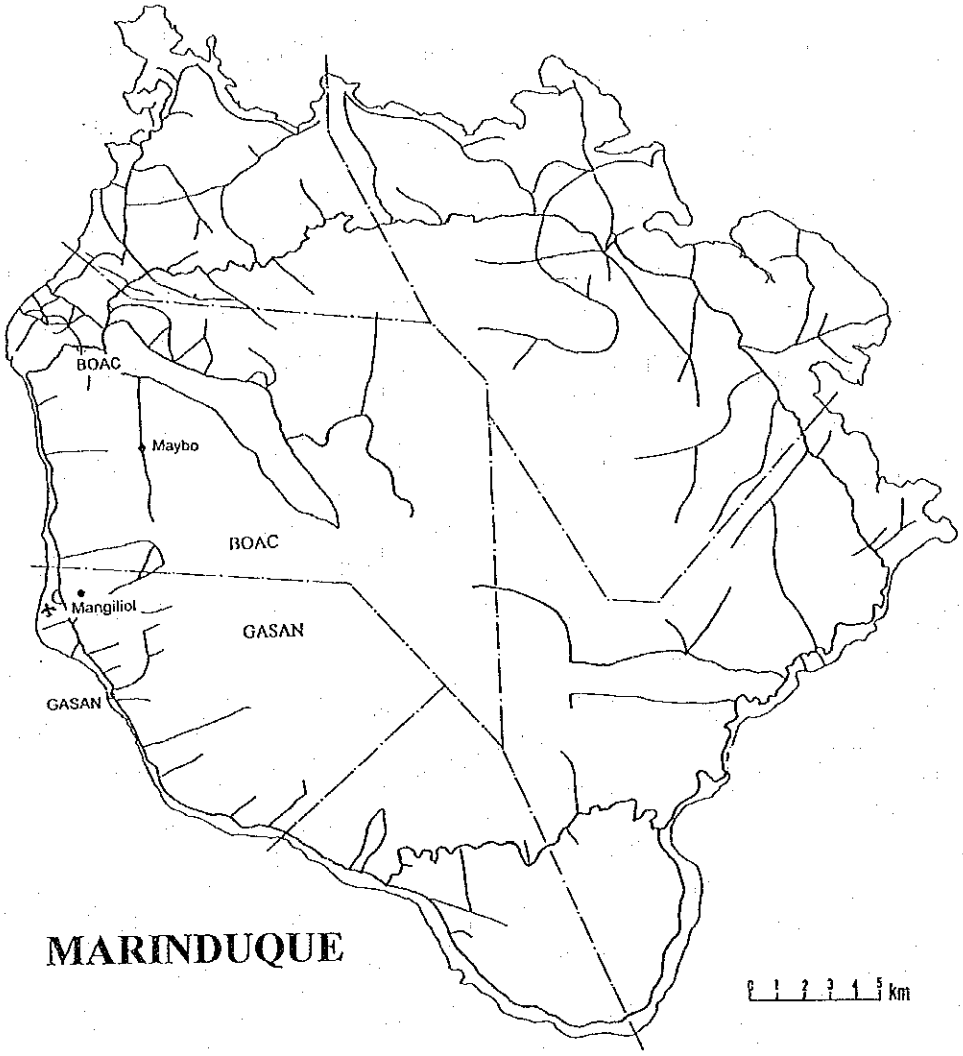


図３・２・１　マリンドゥケ島

モリオネスの他にも、マリンドゥケには、プトンと呼ばれる伝統的な文化がある。調査団は、マリンドゥケで２つバランガイ（後述）を訪れたが、そのどちらでも、盛大なプトン（Putong）の歓迎を受けた。タガログ語で冠を意味するプトンは、その名の通り、祝賀者や主賓に対して冠を被せ、踊りを交えながら感謝の歌を捧げる儀式である。それは同時に、成功や健康や繁栄といった順調な生活が長く続くことを求める祈りでもあるという。

（２）マリンドゥケ州のＡＴＩ，ＲＩＣの活動

ａ．ＡＴＩのスタッフ

ＤＡ（農業省）のＡＴＩのスタッフは、州に２名（うち、１名はコーディネーター）いる。ミュニシパル（郡）レベルでは、農業技術者（Agric. Technologist）は３名で、ガサン郡の場合だと、25のバランガイ（村）があるから、一人平均８村を担当している計算と

なる。Agricultural Technologistは、地域分権化とともにジェネラリストとして活動がされているが、やはり自分の専門分野に指導は偏る傾向がある。

Home Management Technologist（ＨＭＴ）は、数が減ってきている。地方分権化とともに、地方政府の予算不足から人員充足の代わりにＨＭＴをジェネラリスト－Agric.Technologist－として他分野をカバーさせる傾向が強くなっているからである。

村での活動の仕方は、事前に活動の核となってくれそうな人に当たりながら地域での受け皿をつくっていく。活動の内容は、県や国のつくったプロジェクトを村に下ろしていく形が多い。そこで、乗ってくれそうな人たちを集めてグループを作っていくのである。

ｂ．マリンドゥケのＲＩＣ

マリンドゥケ州には218のバランガイがあるが、そのうちＲＩＣが組織されているのは、65グループであり、会員数は1605人を数える。

なお、「マリンドゥケ・プロファイル」によれば、マリンドゥケ州にはＤＡ（農業省）の関連組織として、以下のような組織があり、そのなかに記されているＲＩＣの組織数と（50）、メンバー数（1260）と若干異なる。

組織名	組織数	メンバー総数
・Farmers Association	71	2,314
・Fishermen's Association	22	600
・Rural Improvement Club	50	1,260
・4 - H Club	42	1,149
・Fisheries Cooperative	3	99
・PAFC	1	37
・MAFC	6	147
・BAFC	45	

（出所）Province of Marinduque, 1994 PROVINCIAL INTEGRATED AGRICULTURAL DEVELOPMENT PROGRAM

ｃ．マリンドゥケのＮＧＯ

上記以外に、マリンドゥケでは、次のようなＮＧＯが活動を行っている。

① ＰＢＳＰ（Philippine Buisiness for Social Progress）

マリンドゥケ内でのオフィスはボアックとサンタクルスにあり、Marindu-CAREを通して資金援助を行う。利子率は年利18%。村では、キャッサバ生産に関して資金援助を受けているようである。

② Foster Parents Plan

教育に関する支援（教育資金援助と留学支援）を行う。村では、ＲＩＣ Children Centerが支援を受けているようで、ボランティアの教師の費用や本の資金の援助を受けている。この支援を受けるためには、申請の後、調査を受け選考に通る必要がある。

③ ＤＩＯＳＥＳ

協同組合への支援を行う。Initial Capitalを預けると、その倍の金額まで借り受けることができる。

④ Knight of Columbus

男性のみのメンバーシップ制度で、世界に１万組織されている。月に２０ペソ会費を納めると、どこでも困ったときに、同会のメンバーに助けてもらうことができる。また、他のメンバーが困っていたら助けねばならない。

⑤ ＰＥＣ(People's Economic Council)

女性組織。銀行からの融資を受けるための協力をする。ツーステップローンのようにして、地方銀行（利率15%）、フィリピン銀行（利率10%）から借り受け、（）内の利子率で女性たちのプロジェクトに貸し付ける。

３．ガサン郡マンギリオール村の事例　(Mangiliol, Gasan)

調査団がマリンドゥケで訪れた２つのバランガイは、ともにＵＮＩＦＥＭのプロジェクトがＡＴＩの指導の下にＲＩＣによって実施されているパイロット地区である。

（１）　マンギリオール・バランガイの概況

マンギリオールはガサン・ミュニシパリティの中にある25のバランガイ（村）の１つである。マリンドゥケ州は６つのミュニシパリティ（郡）にわかれており、ガサンには州の空港があり、また州都ボアクからは数キロの距離である。マンギリオールは、このガサンの中心部から3.5キロメートル、空港からは１キロメートルに位置する。

バランガイは３つの地区（pruk）に分れている。人口は現在386人、うち２名がサウジアラビアへ、男性10名がマニラへ出稼ぎに行っている。世帯数は64世帯、うち女性世帯主（未亡人）は８人である。

現在のバランガイ・キャプテンは、Ms.Lilia Senoという女性で、彼女はＲＩＣのメンバーでもある。バランガイ・キャプテンは、バランガイの住民の選挙で選ばれる。彼女によれば、バランガイにおける富裕層はもっと上部の政治活動や経済活動に関心があるので、キャプテンは結果的にあまり富裕な層からは出てこない、と言う。

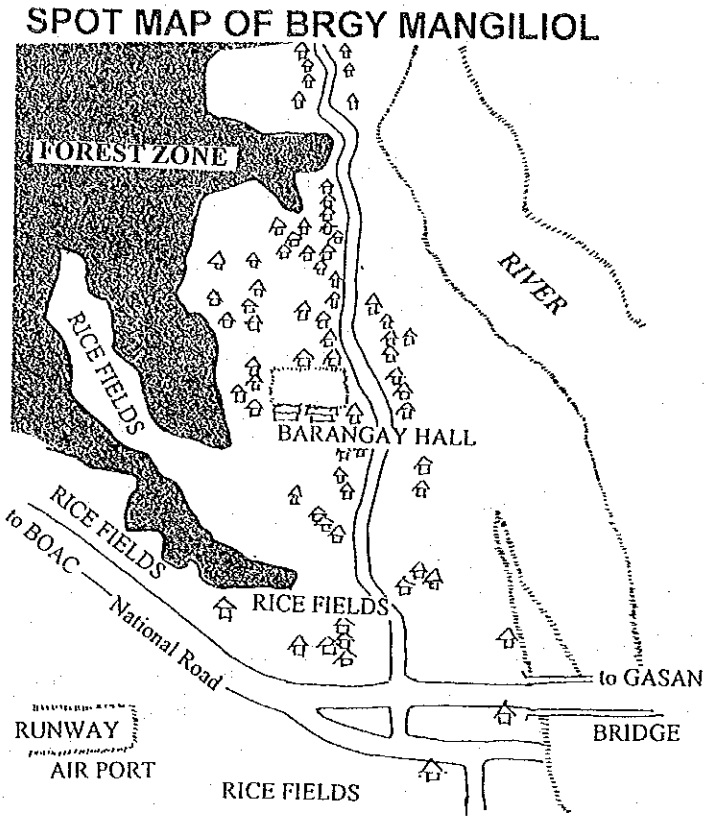


図３・３・１　マンギリオールの概略図

マンギリオールは、州内の比較的裕福なバランガイと比べると、基本的なサービスや施設の面での整備が遅れている。住民の要望の高いものは、洪水の防御、道路の舗装、バスケットボールコートの修理、ごみ箱の整備などである。

バランガイの横を流れる川は、強い雨をともなう台風や集中豪雨時には、自然堤防が決壊し、住宅が洪水に見舞われるという。道路の舗装は、労働力を男性が提供し国際機関ＡＩＢＡＣの援助でなされた。バランガイにある唯一の公共施設はバランガイホールであり、ＲＩＣの会合もここで開かれている。その横はコンクリートで舗装されたバスケットコート兼「他目的」広場になっており、バスケットボールの試合や社会活動が行われるだけでなく、よく住民の籾（palay）の「乾燥場」としても使われている。子供たちは他所のバランガイにある公立学校へ通っており、コミュニティーの中に、公立の学校とヘルスセンターを必要としている。

バランガイは電気事業組合から40世帯が電力の供給を受けている。テレビがあるのは、10世帯だが、ラジオはほとんどの世帯に普及している。

飲料水は共同、個人の掘り抜き井戸（tubewell,artesian well）から汲んでいる。表流水を利用していたことはない。調理用の燃料は、イピルイピルやアカシアの薪、ココナツの殻など。あるいはそれらを炭にして使う。

バランガイの行事としては、クリスマスが最も大きな行事であり、12月25日は午前中教会に行き、午後は家族で食事をする。フィエスタはない。

（２）　階層と生業の形態

ａ．土地所有

64世帯(families)の内訳は、小作農(tenant farmer)20世帯、土地なし農民(landlessあるいは agricultural helper) 44世帯である。屋敷地を所有しているのは54世帯であり、残り10世帯は屋敷地なしということになる。地主はマニラに住んでおり、いわゆる不在地主である。

地主には地代として、根茎作物の収穫量の５分の１を納めている。また、ココヤシの実はすべて地主のものになる。ここの土地はもともとすべて荒蕪地であって、それを小作農たちが自分たちで開墾した。また地主は潅漑など農業インフラを整備していない。そういう事情があり、地代はあまり高くない。マリンドゥケでは一般的に地主の取り分は３分の１だが、ここでは５分の１である。地主は水田から地代を請求していない。米の収穫は全部小作のものになるか不明である。

荒蕪地はまだ村に残っているので土地なし農民はその開拓を地主に申請している。しかし、地主は開墾した土地が農地改革によって小作たちにとられてしまうことを恐れて、開墾を許可していない。

土地の相続は基本的に子どもは性別に関わりなく相続する権利を持つ。しかし土地の面積が小さく子どもが多い場合、通常第一子の男の子にすべての土地を継がせ、他の兄弟姉妹は収穫物やそれに相当する金額をもらう形を取ることが多い。

土地なし農民は、①ココヤシの実から家族総出でコプラをつくる作業（収穫は地主の手配した商人）、②作付けや収穫など他の農家の農作業を手伝うことにより収穫物の５分の１を手に入れる（ここでは作付け時期は家ごとに異なる）、等により生計を立てている。

ｂ．農業生産

農業は最も重要な生計の手段である。マンギリオールで栽培されている主要作物は、米、ココナツ、根茎作物（アロールート、キャッサバ、ウビなど）、とうもろこし、野菜である。これらの作物は通常、小作地で栽培されている。ココヤシは地主の所有である。

バランガイ内の水田面積は５haで、その面積は近年増えていない。しかし化学肥料の導入等によって収穫は増えている。主な栽培品種はＩＲ６４である。土地なし農民は、他の水田での植え付けや収穫を手伝うことにより、関与した収穫の５分の１を手に入れる。しかしこれでは足りないので買うことも多い。

バナナはココヤシの下で根茎作物と混作されている。キャッサバは伝統的な作物であり、やはりココヤシの下で他の根菜作物、バナナと混作されている。野菜は屋敷地内や家から離れた畑で栽培されている。

主な家畜は、豚（平均保有数１～２頭）、鶏（20羽）、アヒル（３羽）、ヤギ、水牛（２頭）、犬（２匹）などである。

農機具としては次のようなものが観察された。水牛用のハロー(Harrow)とスキ(Plow)とソリ。ツルハシ(Heavy Hoe)と柄の短いクワ(Light Hoe)、ナタ(長短)、カマ(Gapas)。カマは刃(12ペソ)だけ買って柄は自分でつくる。ココナツの皮むき機(Lupasun)。Pandan(screw pineの一種)や Buri(オウギヤシ)の葉で作ったマット（寝具にもなる)。穀物を干すのに使う。作物は米の袋に入れて運ぶ。ニワトリ用篭（Tankal)、荷馬車(Caresa)など。

c．農外収入源（ニトの編み物工芸、木彫など）

手工芸品作りが農業に次いで収入の二番目の源泉になっている。ニト（Nito）と呼ばれるツルの一種を編んで、バスケット、食卓マット（place mat）、皿（マニラのレストランで使われているという皿の値段は１ダースで65ペソ程度）などを作る。ニトを編む技術は村の女性なら皆持っているが、難しいものになると皆がつくれるわけではない。市場はガサンとマニラ。マニラはビジネスマンがＤＡの州の農業技術者とコンタクトをとって買い取りに来ているので、ＲＩＣメンバーの方が注文を取りつけやすい。注文があると、畑に出ないで作る人もいる。（写真４　参照）

また、ＲＩＣの活動ではないが、1989年から木彫のプロジェクトが始められた。特に、カラフルに彩色した木製の鳥やその他の土産物の生産は成功をおさめている。協同組合が所有者会員に強力な支援体制をしき、その作品をガサンの商店や空港などで訪問者に販売している。

水産関係では、海辺ではないのでボートを持っている世帯はないが、魚を捕ってきて、干して売ったりしている世帯はある。

また、女性たちはバナナ、コプラ、籾などの行商を行ったり、闘鶏の開催期間の食べ物屋台を経営するなどして生計の足しにしている。

d．男女の作業分担

マンギリオール・バランガイのＲＩＣプレジデント Ms.Monica TAPICによれば、マリンドゥケ島の農作業などにおける男女の一般的な作業分担は次のようになっている。

表３・３・１　マリンドゥケ島の男女の作業分担

作業	主	従
Plowing（犁耕）	男	－
Hoeing（鍬での耕起）	男	女
除草（根茎作物）	女	男
収穫（根茎作物）	男	女
Hawling（根茎作物を家へ運ぶ）	男	－
収穫（稲）	男女	
稲収穫後処理	機械で	
農産物加工（力のいる部分）	男	女
〃　（力のいらない部分）	女	
販売（共同で販売するのではなく、それぞれが別々に販売する）	女	

出典）今回の面接調査による。

e．若者の移住

他のバランガイと同様、マンギリオールも若者の移住の問題に悩まされている。とりわけ高等学校を卒業した者のほとんど半分は、よりよい働き口を求めて、他所の地方へ移住している。特に首都マニラは彼らにとって魅惑的であり、高校を出たらマニラに行って女性は女中として、男性は工場で働きたい。あるいはそこの大学に通いたいと考えている。

（３）　ＲＩＣの活動

a．ＵＮＩＦＥＭの根茎作物プロジェクト

ＵＮＩＦＥＭはフィリピンの４州８バランガイで、農村女性による根茎作物の生産・加工・販売プロジェクトを展開している。資金援助の実施期間は当初1988年～1991年。その後期間が延長され（1992年～1993年）、追加資金の援助がなされている。このプロジェクトはＡＴＩの保護のもとでＲＩＣによって実施されている。

マンギリオールでの根茎作物プロジェクトの開設は1989年に遡る。農業普及事務所（ＢＡＥＸ、現在のＡＴＩ）の元主任普及専門家 Mrs.Rufina Ancheta の指導の下に、州のプ

ロジェクトコーディネーター Mrs.Salvacion Boter と農業技術者 Cleofe S.Perezの協力を得て始められた。当初の参加者は24名であった。このグループはＵＮＩＦＥＭからの85,000ペソの基金を資本として出発した。

1991年１月、グループは出資金 5,400（現在は13,500）ペソの協同組合を組織した。ＵＮＩＦＥＭの他のプロジェクト地区と同様に、マンギリオールの協同組合は、ＲＩＣの全ての協同組合プロジェクトを傘下におさめるＲＩＣ開発協同組合法人（ＲＩＣＤＣＩ）の保護を受けている。

参加者は皆、融資を利用してアロールートの生産を中心に、それだけでなく、ニトの編み物工芸、木彫、籾（palay）の販売、子豚の売買などに資金を活用している。メンバーは15％の利子で10回の分割払いができる融資を利用することができる。グループはアロールートの圧搾機を新設し、また追加投資として jetmatic ポンプを買った。

1991年の12月に彼女たちは85,000ペソの借金をすべて返済している。そして1992年１月に、ウビとパトラの生産のための 150,000ペソの融資が再びグループに認められた。まず100,000ペソの融資が1992年２月に許可され、２度目の50,000ペソの融資は1992年の７月に行われた。基金の融資に基づいて、彼女らは新たな根茎作物プロジェクトを開始した。（追加融資15,000ペソの使い道について聞いたところ、その第一位はローンの返済に当てられた、という答えが返ってきた。）

以上概観したように、マンギリオールのＲＩＣは主に３つの作物のプロジェクトに取り組んでいる。アロールート（arrowroot、クズウコン）生産、ウビ（ubi、紫ヤムイモ）生産、それにパトラ（patola、ヘチマ）栽培である。

ｂ．アロールートの生産

アロールートという作物は、ＲＩＣの活動が始まる以前から、おやつ用のクッキーの原料として栽培されてきた。ゆでて食べてもおいしいが、おなかにもたれるので、通常は食事用には利用されない。そのため栽培面積はバランガイ全体で２haほどでしかなかった。余剰や廃棄部分は豚の餌にしている。（写真４～６　参照）

1990年に、ＵＮＩＦＥＭの基金から3,365ペソを費やして自分たちのアロールート圧搾機を新しく設置した。その圧搾機を使って、アロールート粉を生産している。アロールート粉はクッキーの良質の原料となり、小麦粉のクッキーより高く売れる。40袋の塊茎から乾燥アロールート粉を7.5キロを生産することができる。取り出し（recovery）率は14％である。塊茎を潰す作業は男性の仕事であるが、圧搾後の処理は女性の役割である。原料のない数カ月は、他の利用者に圧搾機を貸している。この使用料として組合は1992年に2,378ペ

ソの純収入を得ている。（写真５　参照）。

プロジェクトの最初の年（1990年）は、総面積6.25haにアロールートが作付けされた。価格は乾燥粉で25ペソ／ガンタから33ペソ／ガンタに上昇した。この期間に多くのバイヤーが現われたのに勇気付けられて、彼女たちはアロールートの栽培面積を拡大した（共同栽培面積は８ha）。1991年には乾燥粉の価格が40ペソ／ガンタまで上がり、中には48ペソ／ガンタの値をつける者まで現われた。キロ換算すると平均20～25ペソ／kgになる。

塊茎の形で買い付けるバイヤーはいない。バイヤーたちがどこから来て、どのような形でアロールート粉を利用しているかは定かでない。彼らは不定期に訪れ、粉を買い付けていく。昨年はマニラやバタアン州からのバイヤーだった。

昨年（1992年）の収穫量は７トンで、すべて販売した。州の他の地域でも栽培するようになり、過剰供給で価格は下落した。しかし、アロールート粉は虫が付きにくいため、粉の形でなら１年間くらい保存できる。そのため、捨て値で売るよりはストックすることを選ぶことも可能である。

現在はＲＩＣのメンバー25人で10ha栽培している。各自がそれぞれ自分の畑で作っている。今ではＲＩＣのメンバーだけでなく、バランガイの農民の大部分が栽培している。

ｃ．ウビとパトラの生産

ウビとパトラ（へちま）はプロジェクトにより1992年から導入された作物である。初年度は、農民の一人が土地を提供してくれたため、それぞれ総計約２haに作付けし、そこで共同栽培ができた。しかし、次年度である今年（1993年）は、土地保有者の農民が水稲を栽培したかったため、その土地の返還を要求された。それに代わる適当な場所が見つけられなかったので、現在は、裏庭における小規模栽培に移っている。アロールートは高地で栽培されるのに対し、ウビは米と同様、低地で栽培されている。

ウビの導入のきっかけはミンドロから州の農業オフィサーが種芋を持ってきたことによる。初年度の収穫は1.7haで1,000kgであった。おいしいが高価（塊茎の形で25ペソ／kg）なので、すべて販売している。その多くは種芋として地域の市場で販売された。ミンドロやルソン島南部のラグナ州など、バイヤーもまだローカルである。（写真33～36　参照）

パトラは、若いうちに収穫して生野菜として地域の市場で売られたものもあるが、多くは乾燥してストックされた。パトラの栽培には、アロールートやウビよりずっと手がかかるという。乾燥パトラのストックは大量に売れ残り、それらを入浴用スポンジやその他の製品への転換を模索している。我々が、日本では化粧品（ヘチマ水）としても利用されているという話を紹介すると、フィリピンの女性たちは非常に高い関心を示した。

（４）　農村女性の生活の一例：　モニカさんの場合

マンギリオールのＲＩＣの代表（RIC President、あるいはRIC Project Manager）であるモニカ（Ms.Monica TAPIC）さんの家族の暮らしぶりを、彼女にインタビューして解った範囲で紹介してみよう。

ａ．家族形態

インフォーマントであるモニカさんには、夫との間に二人の娘がある。娘は二人とも結婚していて、上の娘（長女）は政府関係の仕事に就いて町に夫と住んでいる。下の娘（次女）も会社の仕事をしている。モニカさん夫婦は、次女の家族と同居しており、次女の夫はジープニー運転手、子ども（モニカさんからみれば孫）が一人いる。

モニカさんはこのバランガイで育った。通常結婚はバランガイ内または近隣のバランガイ内である。モニカさんたちはどちらの両親とも同居しなかった。拡大家族が基本であるが、このような核家族も近年みられる。

モニカさんの場合、姉妹が結婚してミンドロに行ったが、それ以外に家族の移動はない。

ｂ．土地利用

モニカさんの世帯は小作農で、水田１haと畑１ha（ココヤシ＋バナナ＋キャッサバ＋アロールート）を保有している。

① 米：　水田はすべて天水の水稲栽培で、陸稲は作っていない。１haの水田からの収穫は、家族５人の生活に何とか間に合うが、収穫の悪い年は不足する。しかしそのような時も米を買うことはせず、キャッサバなど他の食品で代替する。

② バナナ：　畑のココヤシは地主の所有である。ココヤシの下で、バナナと根茎作物とを混作している。Sabaという調理用バナナを500本（trees）育て、昨年は 2,000本（pieces)販売した。バナナは１本の木から１房採れ、１房に約150本がつく。自給と販売の割合は約２：１。米の代替作物として主に朝食として食べる。調理用バナナの他に、Latundanという生食用バナナを、屋敷地や畑の回りに20本栽培している。自給用で、おいしく、また健康にもよい。

③ キャッサバ：　キャッサバは 200本ほどで、あまりたくさん作っていない。やはりココヤシの下で他の根菜作物、バナナと混作している。加工はキャッサバチップにするだけで、キャッサバパウダーにはしていない。収穫したらすぐ地域の市場へ販売する。販売と自給の割合は約半々であるが、米の代替作物なので、米の収穫にあわせて変化する。主に朝食にゆでででそのまま（もしくは砂糖と）、またはココナツミルクでプディング、ケーキを作り食べている。

④ アロールート：　（３）ｂ．の項を参照

⑤ ウビ：　（3）c．の項を参照。

⑥ 野菜：　野菜は屋敷地内と1kmくらい離れた畑で栽培している。家の近くの作物は泥棒にあうし、野豚の被害もある。種類は、ナス、ウビ、(Dioscorea spp.)、トウガラシ、オクラ、カボチャ、ナガササゲ(String Bean: Vigna sesquipedalis)、ニガウリ、ガビ（Colocasia spp.里芋）など。屋敷地でも、他の植物が小さい間は野菜を栽培していたが樹木が育ち暗くなると生育が悪くなるため、もう屋敷地ではあまり作っていない。

c．屋敷地周りの植物

モニカさんの屋敷地では、表3・3・1、図3・2・3ような種類の植物が観察された。

屋敷地周辺には、生活に欠くことができない有用植物がある。人為的に改良を重ねてつくりあげてきた多種類の植物が少数ずつ組合わせられている。これらの資源の無意識な配置には、女性が生活を営む上での貴重な資源の配列を読み取ることができる。換金を目的とした作物もあり、生活に変化を与える香辛料があり、味覚をそそる果実があり、病気に備えた薬草が用意されていたりする。これらの屋敷地のまわりのほとんどが生活に欠くことができない有用植物であり、この多様さが農村生活をいろどりのあるものにしてくれるといえよう。

表3・3・2　観察された植物

植物名	学名	備考
ココヤシ	Cocos nucifera	（おそらく）太平洋諸島原産
パパイヤ	Carica papaya	[パパイヤ科] 熱帯アメリカ原産
カマンシ	Artocarpus alisilis	[クワ科] パンノキ。未熟果を食べる
マンゴ	Mangifera indica	[ウルシ科] インド及びビルマ原産
バナナ	Musa. spp.	[バショウ科]
グアバ	Psidium guavava	[フトモモ科] 熱帯アメリカ原産
サントル(santol)	Sandoricum coetiape	[センダン科] マレーシア原産
スターアップル (Kaimito)	Chrysophyllum lanceolatum	[アカテツ科] インド～フィリピン分布
ジャックフルーツ	Artocarpus heterophyllus	[クワ科] 南インド、アッサム、ビルマ原産
レモン(ローカル)	Citrus spp.	
グアバノ (サワーソップ)	Annona muricata	[バンレイシ科] 西インド諸島原産 トゲバンレイシ
カカオ	Theobroma cacao	[アオギリ科] 熱帯アメリカ原産
ガビ（タロイモ）	Colocasia esculenta	[サトイモ科] 東南アジア原産
トウガラシ	Capsicum annuum	[ナス科] 熱帯アメリカ原産
オクラ	Abelmoschus esculetus	[アオイ科] アフリカ原産？
ニガウリ	Momordica charantea	[ウリ科] 旧大陸原産
マロンガイ	Moringa oleifera	[ワサビノキ科] インド原産
トゥバン バコッド	?	おなかによい。
マドリカカオ	?	ＮＦＴ
ニーム	Azndisachta indica	[センダン科] インド原産
パンドン	Pandanus Luzoniensis	[タコノキ科]
アスエテ	?	

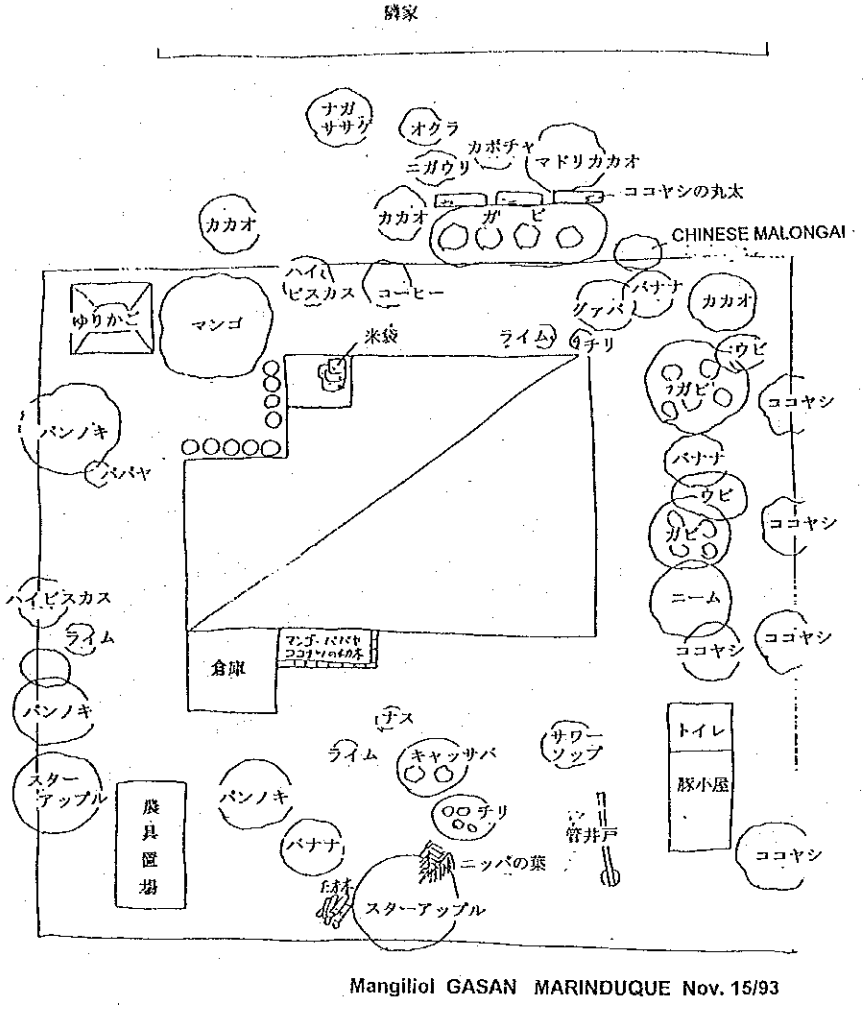


図３・３・２　屋敷地周辺の有用植物

表３・３・２　モニカさん夫婦の１日の生活時間

時間	妻	夫
4:00	起床 水浴び 掃除 洗濯 調理（昼の分も）	起床 水浴び 休んだままラジオを聞く
6:30	朝食 家畜（豚、ヤギ、鶏）の世話 世話がすんだら畑へ	朝食 大型家畜の世話 畑へ
11:00	昼食 （休憩はよほど疲れていない限り少ししかとらない） 畑へ （ニトの編み物の注文があるときは畑に出ずに家で作ることもある）	昼食 畑へ
16:00	畑から戻って食事の仕度	
17:00		畑から戻る
18:00	夕食 テレビを見る 娘の家に遊びに行く	夕食
21:00	就寝	就寝

d.　一日の生活時間

モニカさん夫婦の平均的な一日の生活時間は、およそ表３・３・２のようである。

４．ボアック郡マイボ村の事例　(Maybo, Boac)

(１)　マイボ・バランガイの概況

マリンドゥケの州都はボアクである。ボアクは面積 25,017ha、人口 46,055人（1991年２月）のミュニシパリティのなかに、61のバランガイを構成している。

マイボはその中の一つのバランガイであり、ボアクのポブラシオンから 4.5kmほど内陸部にある。山岳地帯の奥まった地域に位置するため、ポブラシオンからは、４つのバランガイを通り抜け、曲がりくねった道を30分近くも車を走らせなければならない。

マイボの住民は、マリンドゥケの経済的社会的中心から地理的に孤立していると感じている。それゆえ、彼らは優先項目の一つとして、商品をポブラシオンで取引できるように、

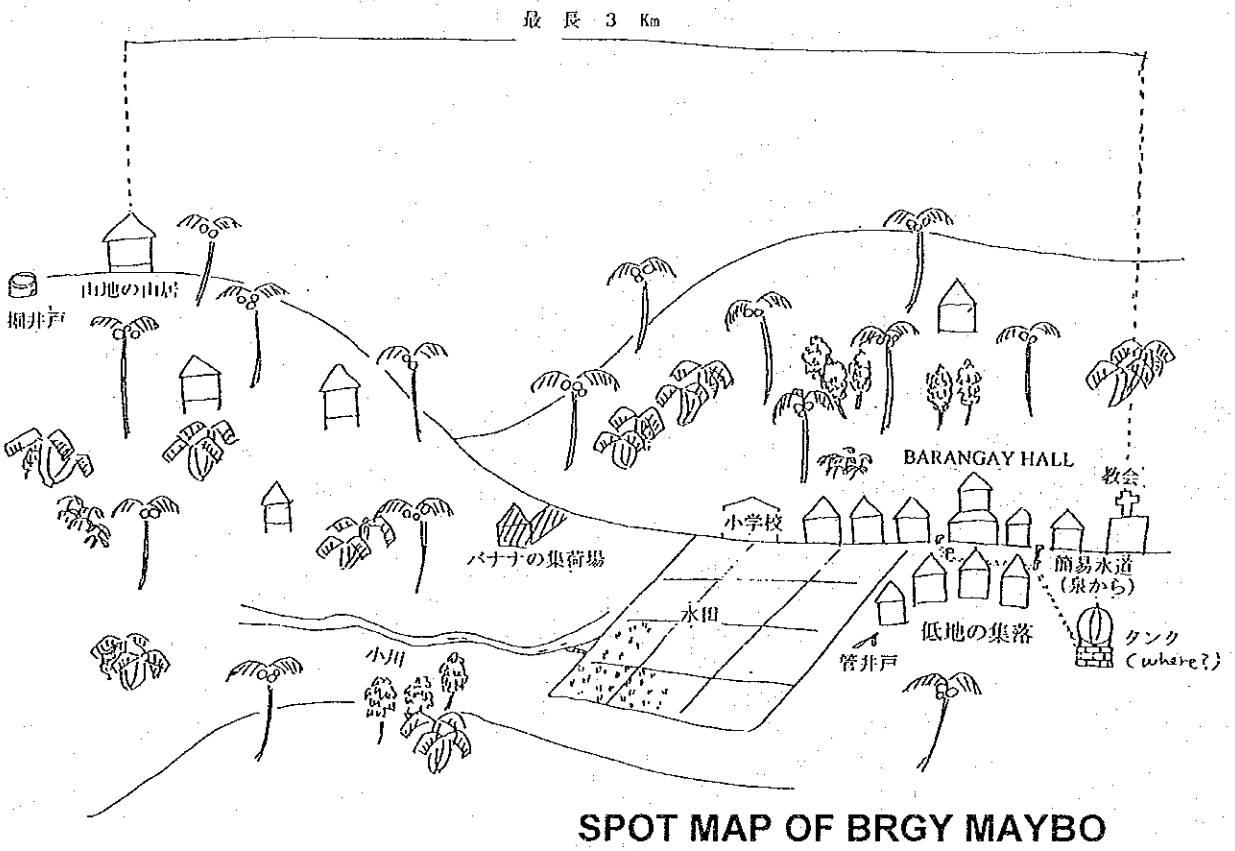


図３・４・１　マイボ周辺の概略図

より安い定期的な公共輸送機関の必要をあげている。トライスクルなら片道50ペソ、ジープなら片道100～125ペソかかる。しかも、雨季の期間、特にぬかるみがひどく道路が寸断された状態の間は、輸送手段は事実上存在しない。

バランガイの面積は836ha、世帯数189世帯、人口は1,080人である。

バランガイ・キャプテンは、独身の男性で、4haのココナツ畑を持っている。1982年からキャプテンを務めており、その間バランガイの施設面では、潅漑の修理（1984年）、道路のコンクリート舗装（86年）、バランガイホールの新築（87年）、チャペルの改修（87年）、簡易水道の敷設（88年）などが実施された。

飲料水は、低地では、管井戸や政府のつくった簡易水道を利用している。簡易水道は、泉の水をタンクにためて配水するものだが、タンクが小さすぎるので、朝の早いうちに空になってしまうそうである。高地では、泉と掘り井戸を水源としている。掘り井戸は水位が低いため、水汲みが困難な上に、開いているために水質の汚染も問題である。

調理用の燃料には、ココナツの葉や殻を用いている。ヘルス・センターは、無料の医療と歯の診療を週2回提供している。約34世帯に電気が入っている。その他の世帯では、照明に灯油を使っている。住民のほとんどの学歴は高等小学校レベルである。主な収入源は農業、ニトの編み物工芸、家畜と家禽の飼育、アロールートの製粉である。

（2） 階層と生業の形態

a．土地所有

189世帯の内訳は、自作農50世帯、小作農（tenant farmer /farm manager）39世帯、土地なし農民（agricultural helper）100世帯である。

マリンドゥケ一般にいえることだが、マイボの土地所有権は一握りの地主の手に握られ、農民たちは小作制度の下で耕作している。農産物は収穫の3分の1が地主に、残りの3分の2が農民に与えられる。地主はマニラやボアクなどに住んでいる不在地主である。ココヤシの実はすべて地主のものになる。

自作農の平均面積は約1ha。所有地のほかに小作地として保有している部分も若干ある。所有地のほとんどは相続によるもので、農地改革によって入手したものではない。

b．農業生産

マイボは丘陵地であり、稲の栽培には潅漑が必要なことから水田は全体で17haしかなく、すべて潅漑田である。これを44世帯が栽培している。

この共同潅漑システムは、National Irrigation Administrationによる Small Water Enpounding Programにより1962年につくられた。水源はバランガイに一つだけある小川で

ある。84年に修理された。

この地域には、苗床として竹で編んだ台の上に薄く土を広げてそこで苗を作る Dapog System がある。約20日間育苗し、20cmほどになったものを本田に移植する（写真10　参照）。

マイボの主要作物はココナツ、バナナ、キャッサバ、アロールートである。ココヤシの下でバナナと根茎作物が混作されている。

野菜は、ナガササゲ、ナス、オクラ、トマト、トウガラシ、サツマイモ等が栽培されている。また、ＤＡによって大豆も導入されているそうだが、普及の程度は不明である。

バランガイ・キャプテンによれば、家畜はバランガイ全体で、カラバオ100頭、牛10頭、豚350匹、ヤギ50匹ほどが飼育されている。また多くの家庭で鶏やアヒルも飼われている。

c．農外収入源

ニトの手工芸品づくりは、マイボではごく普通の経済活動である。ほとんど全ての女性は、老いも若きも、ニトから皿、バスケット、食卓マット、装飾品などの編み方を知っている。ほとんどの家庭で編まれているし、また、待合い小屋や互いの家にニトのつるを持ち寄って、集まって編むこともある。

ニトはマリンドゥケに自生しているツル植物の一種である。ニトのつるを採集して、それを編み手に売って生計を立てている人もいる。つる 100本の束が１束６ペソで売れる。

d．男女の作業分担

農作業の男女の責任分担が習慣として行われており、男性は、コメ、ココナツ、トウモロコシのような主要作物の整地、植付け、管理と維持を担う。女性は、草取り、作物の収穫、水やりなど、農業労働を手伝う。家庭菜園とアヒルの飼育も同様に、女性の責任領域とみなされている。

根茎作物プロジェクトが導入されたことにより、アロールートはバランガイの重要な作物になった。それゆえ、根茎作物の栽培とそれに続く女性の所得創出プロジェクトは世帯単位の活動となり、男性も女性と一緒に、プロジェクトの主要な活動の仕事に従事した。夫と妻が一緒に高地にあるアロールートの畑へ出かけることは別に珍しくないという。

e．村の闘鶏（Sabon）

闘鶏は、主に男性の楽しみである。闘鶏の収益はバランガイカウンシルの主要な収入源となる。しかし、このバランガイでは、昔からあまり闘鶏の飼育自体は行ってこなかった。現在飼っているのも10世帯に満たないそうである。鶏の雛は、ミンドロやケソンで買ってくるという(写真55～57　参照)。

（3） ＲＩＣの活動

ａ．ＵＮＩＦＥＭのプロジェクト以前

マイボでは1970年からＲＩＣの活動が始まった。主な活動として、①養豚、②ニトの手工芸、③野菜栽培、④栄養、⑤教育、⑥キャッサバの加工（ケーキやプリンを作って、学校の子供に販売する）などの活動を行っていた。ＵＮＩＦＥＭのプロジェクトが始まる前年までは、組織化当初の17名からメンバーが増えなかった。その理由として、①このバランガイは散居型で皆を集めるには地理的に困難であること、②活動が女性たちの関心を集められなかったことが挙げられていた。

ｂ．ＵＮＩＦＥＭの根茎作物プロジェクト

1988年から始まったＵＮＩＦＥＭの根茎作物プロジェクトは、マイボでも、マンギリオールとほぼ同じような過程をたどって組織化された。まずマイボのＲＩＣが農業省のＡＴＩによって再編・再活性化された後、1989年にマイボでプロジェクトが設立された。1992年、マイボのＲＩＣはＤＡの農業技術者Ms.Rose Lastraの指導の下で無限責任制の多目的協同組合となった。ＲＩＣの代表は協同組合長も務めている。

ＵＮＩＦＥＭからＲＩＣが受けた融資基金は、最初が総額 85,000ペソ、２度目も総額85,000ペソである。これらの融資の返済は計画通り順調に進んでいる。

ＲＩＣのメンバーは、プロジェクトの開始当初28名に増やされたが、現在活動しているのは25名である。2名はサウジアラビアとマニラへの移民によって、1名は健康状態を悪くしてメンバーから外れた。

ＲＩＣのミーティングは月１回。ＡＴＩが指導するセミナーとトレーニングは年に２回程度であり、とくに役員はかなりのトレーニングを受けている。また、メンバーの多くは、過去のＲＩＣの資源開発プログラムから恩恵を受けており、かなりの経験を積んでいる。

ＲＩＣのメンバーではない女性（外観からして50歳前後）へ質問してみた。彼女は未亡人で、0.25haの水田（小作）と１haのココヤシとバナナの畑（自作）を持っている。これまでＲＩＣに入らなかったのは、農作業が忙しかったためらしい。メンバーになりながら、ミーティングやトレーニングに参加できないことが恥ずかしいため、との返答であった。このような考え方が伝統的にあるのだろうか。現在は自分の時間ができてきたので、ＲＩＣに入りたいといっていた。これは社交辞令なのか、ＲＩＣの収入創出活動に関心があるからなのか、真意は定かでない。

c．アロールートの生産

マイボの女性にとって、アロールートの栽培は、肉体的にも時間的にも他の作物よりもきついということはなく、むしろ容易な仕事のようである。作物の生来の性質がマリンドゥケに適しているため、屋敷の周辺や、あるいはココヤシやバナナと間作される形で、栽培されている。病気にも強く、殺虫剤や肥料をあまり使わなくても成長し、どんどん増殖する。だから、マイボの女性はこの作物を栽培して、家族の臨時収入源としているだけでなく、栄養摂取の点でも良き補足源にしている。

しかし、マイボの丘陵地帯だけがアロールートの栽培に適しているわけではないから、根茎作物プロジェクトの成功や州政府の栽培の奨励により、今では他の地域の人々やＲＩＣの非会員もアロールート生産に乗り出してきている。そのため、地域市場ではアロールートは供給過剰におちいる結果となった。

このように、増産してもそれに見合う市場がないこともあって、以前かなりあったマイボでの栽培面積は現在は８haまで減少している。（ＵＮＩＦＥＭの報告書には、マイボでは25名の会員によって総計13.75haでアロールートが栽培されていて、各会員はこの作物を平均800平方メートルから１ha以上ほど栽培している、と記されている。どうやらこの１年の間にさらに減少したようである。）

この栽培面積の減少は、後述するように、調理用バナナの栽培の活性化と反比例する形をとっている。

d．バナナの栽培

バナナはココヤシの下でアロールートなどの根茎作物と間作されている。マイボの女性たちは、それとは別にさらに0.25ha～１haくらいの農地をバナナの集約栽培にあてている。以前は、生食用であるLatundanを屋敷の近くに数本植えるのみで、現在のような調理用バナナ（Saba）の栽培はあまり行われていなかった。

調理用バナナの栽培が始まったのはつい近年からである。マニラの商人がマリンドゥケで調理用バナナを栽培していることをたまたま聞きつけ、全島の調理用バナナを買い付け始めてから、とのことである。週に１回、ボアック地区のバナナを買い付けにジープがやってきて、毎回約８トンを買い付けていく。マイボでは、ＲＩＣメンバーのルーシーが夫と共に取り仕切っており、山の入口の集荷場に水牛のソリなどで運んでくる。村人から35ペソ／100本で買い付け商人に40ペソで売ってマージンを上げている。

生のまま市場に出すほかに、調理用バナナは、ビネガー、ケチャップの材料としてや、バナナチップ、バナナフリッターとしてなど現在需要が高い。自分たちで加工して、バランガイ周辺を行商して歩いたり、週末の「闘鶏」の開催期間に屋台で売ったりしている。このように村の多くの人たちが、このバナナの栽培を始めてきているらしい。そのために、これまでココヤシとの間作作物であったアロールートの栽培が著しく減少しているらしい。

e．その他の所得創出活動

アロールートとバナナの栽培に加えて、多くの女性たちは副業として、アヒルの繁殖、野菜の生産、ニトの編み物工芸、コプラの販売などに従事し、生計の足しにしている。彼女らは同様にそのために融資を得ている。特に、あるメンバーはアヒルの繁殖プロジェクトに成功して、この活動で年間8,000ペソの純収入を稼ぎだした。

プロジェクトに関係している女性の大多数は、補足的な所得創出活動として、ニトの編み物工芸に従事している。しかし、マイボは地理的に孤立しているから、女性たちがこれらニトの生産物を、思うようにすみやかに売ることはむずかしい。彼女らは、ボアックの中心街の商店に供給したり、あるいは不定期に訪れる首都マニラからの商人の注文に応じたりしている。プロジェクトの現在の現地コーディネーターのMs.Leycoと農業技術者のMs.Lastraは、終始一貫これらの女性たちの販売努力を支援し、彼女らのために買い手を見つけたり、マニラに生産物を売りに行ったことさえある。

（4） 農村女性の生活の一例

a．ミゲラさんの場合

マイボのＲＩＣの代表（President）であるミゲラ（Ms.Miguela MANAHAN）さんの生活の様子を紹介しよう。彼女はバランガイ・カウンシルのメンバーでもある。

（a） 家族形態

インフォーマントのミゲラさんは、1976年に夫が42歳で亡くなり、未亡人である。子供は息子が４人、娘が３人いる。息子は皆高校を終えるとマニラに行き工場で働いていたが、そのうち３男と４男は失業して帰ってきた。しかしまた機会があったらマニラに戻りたいと考えている。４男以外は皆既婚である。３男の家族は自分たちの家を持っている。長男の娘が、マニラでは費用がかかって十分養育できないのでこちらで暮らしている（長男には他に２人娘がいる）。

娘は、長女が商人と結婚してミンドロに行っている。次女も結婚してミンドロに渡り、レストランで働いている。３女はカレッジを終えるとサイパンに渡り、一年契約で縫子として働いている。３女以外は皆高校までである。

（b） 土地所有

自作地1.5ha（ココヤシ＋バナナ＋キャッサバ＋アロールート）を所有している。

そのうち、0.5haはミゲラさんが母親からの相続した。残りの１haはボアクに住む不在地主から1960年代に1,800ペソで購入した。これは当時でも、とても安い金額であったそうである。このようにして土地が手に入るケースは少ないらしい。

ミゲラさん一家は水田を持たないので、米を購入しなければならない。

（c） 栽培作物

① ココヤシ： ミゲラさんは 700本のココヤシを栽培している。4ヵ月ごとに収穫し、コプラをつくる。雇いはほとんどせず、家族のみで行う。息子たちがいなかった時期は、土地なし農民である甥と姪が収穫の3分の1を報酬として手伝っていた。ココナツの収穫作業は、専門の商人が来て行うのが通常らしい。

② バナナ： 今年から調理用バナナの苗木300本を近所の人から買い付け、栽培を始めたとのことである。

③ アロールート： バナナの導入と共に、アロールートの栽培をやめている。

④ キャッサバ： 自家消費用に栽培している。朝食やミリエンダ(mirindal；おやつ)で食べるが、もっぱら茹でるのみ。その他の調理法はしない。

⑤ 野菜： 訪問した屋敷地には野菜はほとんど見られなかった。

（d） 屋敷地周りの植物

表3・4・1、図3・4・2を参照されたい。

d．メンチータさんの場合

ＲＩＣのメンバーの暮らしぶりをもう一人紹介しよう。メンチータさんの一家は、土地なし農民である。

（a） 家族形態

インフォーマントのメンチータ・ソリアーノ（Ms.Menchita Soriano）さんは、27歳。家族は39歳の夫と4人の息子と暮らしている。14歳の時に結婚して、そのとき産んだ1番上の子供は現在13歳になる。

（b） 住居

住居は、バランガイの一番の山手に位置し、学校のある中心地から1.5km離れている。緩い傾斜の斜面に住居を設けており、自分たちで建てた草葺きの木造である。経済的な状況は決して十分であるとはいえない。土地は所有しておらず、すべて借りている。

住居の概要は図3・4・3で示した。床に竹を敷きつめており、窓も竹でつくられている草葺きの屋根の住居である。2m四方程度の居間と長椅子のおいてある個室を中心に台所からなる簡素な住居であるが、湿気が多く温度が高いこの地域では、風が住居内に通りやすくしつらえてある。台所には、5つの石で3ヵ所に炉を設けた炊事場がある。

飲料水は、住居から 200m離れた小さな谷に湧き出している泉で汲む。水汲みは夫の役

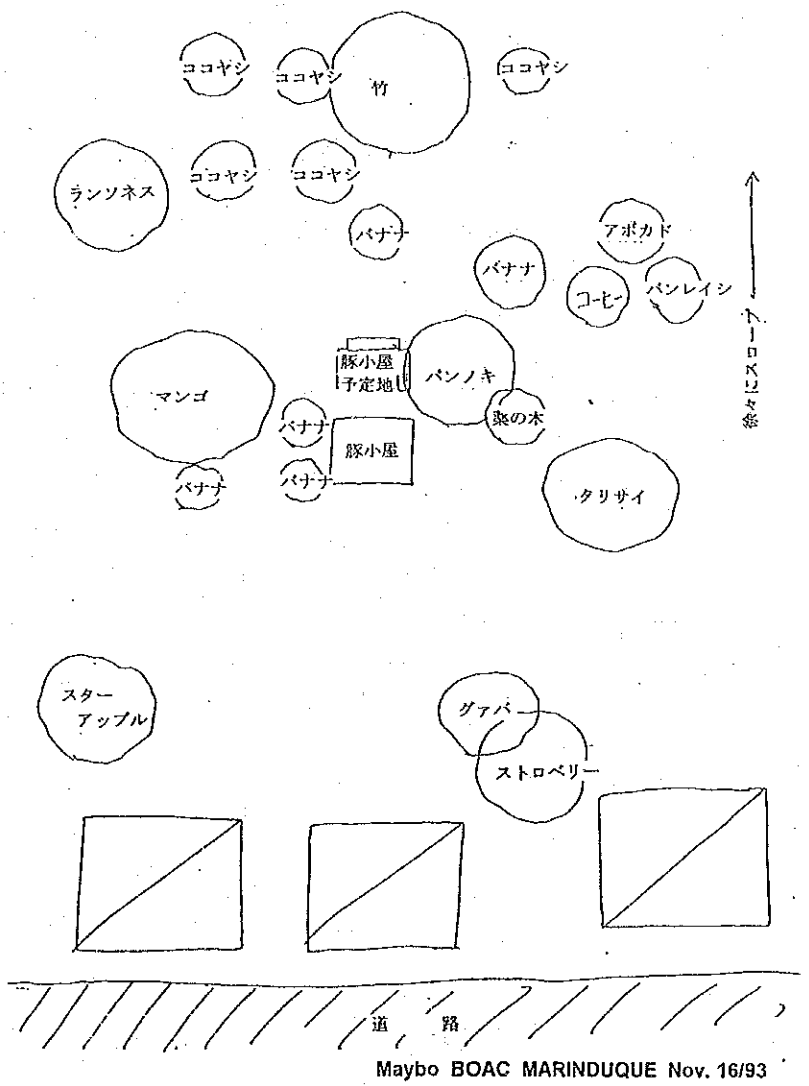


図３・４・２　屋敷地内の有用植物（マイボ）

表３・４・１　観察された有用植物

植物名	学名	備考
ココヤシ	前述	
カマンシ	〃	
マンゴ	〃	
バナナ	〃	
グアバ	〃	
スターアップル	〃	
コーヒー	Coffea sp.	[アカネ科]
アティス(Atis)	Annona squamosa Sugar apple	[バンレイシ科] 西インド諸島原産
アボガド	Persea americana	[クスノキ科] 熱帯アメリカ原産
ランソネス	Lansium domesticum	[センダン科] マレー原産
タリサイ(Talisai)	Terminalia catappa	[シクンシ科] 旧世界熱帯に分布
サントル	前述	
ストロベリー	[不明]	

割だ。飲料水は、50リットル程度のポリバケツに汲んで使用する。ポリバケツが置いてある棚は、洗濯ができる作業台になっている。便所は、特に住居の周囲に用意していない。

（c） 生計の手段

メンチータさんはバスケットを自宅で編む（ニトの編み物の）仕事をしている。

夫は農業に従事している。ココナツ採りの腕は名人級で収穫期１シーズンに千個を採る。その技術を主たる収入源としている。

住居の周辺には、バナナが20本、アボガドの木３本、ジャックフルーツ４本、マンゴの木４本、サントールという野性のシトラス類の木２本とタマリンドの木が１本ある。

山の畑ではウビ、ガビ（タロ芋、里芋の類）、アロールート、キャッサバ、カモーテ（サツマ芋）、メイズ、moon beans、サヤインゲン、トマト、カボチャ類等を植えている。

その他に鶏を30羽、豚を８匹飼っている。鶏は日に２個の卵を産み、食事に供される。家禽と家畜の飼育は妻のメンチータさんの仕事である。

（d） １日の生活時間

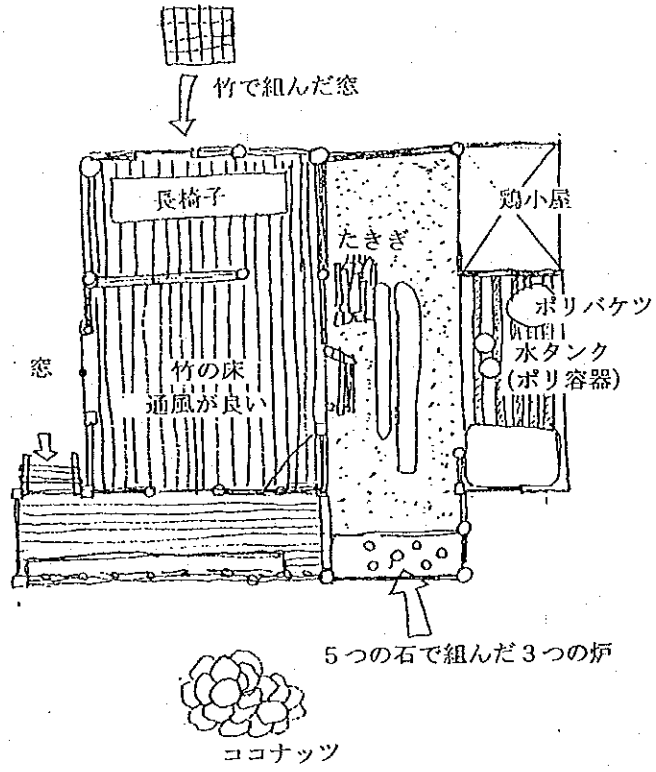
表３・４・２ メンチータさんの１日の生活時間

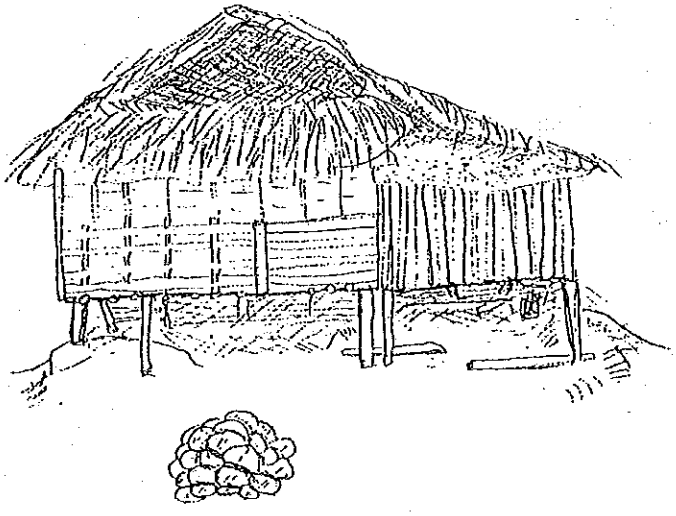
時間	暮らしの内容　妻	夫
4:00		起床 水汲み　ココナツ採り
5:00	起床　朝食の準備	
6:00	通学する子供を起こす　朝食給仕 鶏と豚に餌をやる 住居と庭の掃除　洗濯	
6:30		未就学児と朝食
	自宅でバスケットを編む	弁当を持って山の畑に一人で作業に出る （作目：キャッサバ、アロールート、サヤインゲン、moon beans、カボチャ、ガビ、コーン、メイズ）
11:00	昼食の準備	
12:00	未就学の子供たちと昼食	
	自宅でバスケットを編む	
17:00	夕食の準備	
18:00		山から帰宅
19:00	夕食 子供を寝かせる バスケットを編む	夕食
21:00	就寝	tuba/local wineを楽しむ
23:00		就寝

出典）面接調査による

夫は、４時に起床して、水汲み等の作業をする。妻は、５時に起床する。朝食の準備をし、学校に通う２人の子供に食事をさせる。学校までは1.5kmあり、徒歩で通う。家から学校までは下り坂だ。

就寝時間は、妻は９時だが、夫は11時になる。夫が就寝時間が遅いのはトゥバというヤシ酒や土地の酒を楽しむためである。





便所はない
水汲み場は２００m家から離れた
小河川の谷部に滴る湧水を利用

Maybo, Boac Municipality　MARINDUQUE
Ms. Menchita Soriano's House
Nov. 16/93

図３・４・３　Ms.Menchita SARIANO の住居（マイボ）

５．女性対象の農村開発事例と農業、農村生活（２）―ボホール

（１） ボホール州の概況

ボホール島は、総面積は、411,726ha、フィリピンの中で10番目に大きな島である。（図３・５・１　参照）わずかに卵形をしており、73の小島に取り巻かれている。北はカモテス海、北西はセブ州、西はネグロス東部州、南西はシキホル州に境を接している。ボホール島は主に、なだらかに起伏する丘陵と低い山々から成り、平坦地は台地や小さな谷間に散在するか、または入り組んだ海岸線をもつ海沿いに狭い低地がみられるだけである。

気候は、隣接した諸島で発生する湿気団の完全な影響から外れているので、降水量は比較的少ない。最大降水量は６月から10月にかけての月で発生するが、台風の南西の風による洪水が頻繁に起こるわけではない。海岸沿いの方が暑くて乾燥しており、内陸部の方が涼しく湿っている。

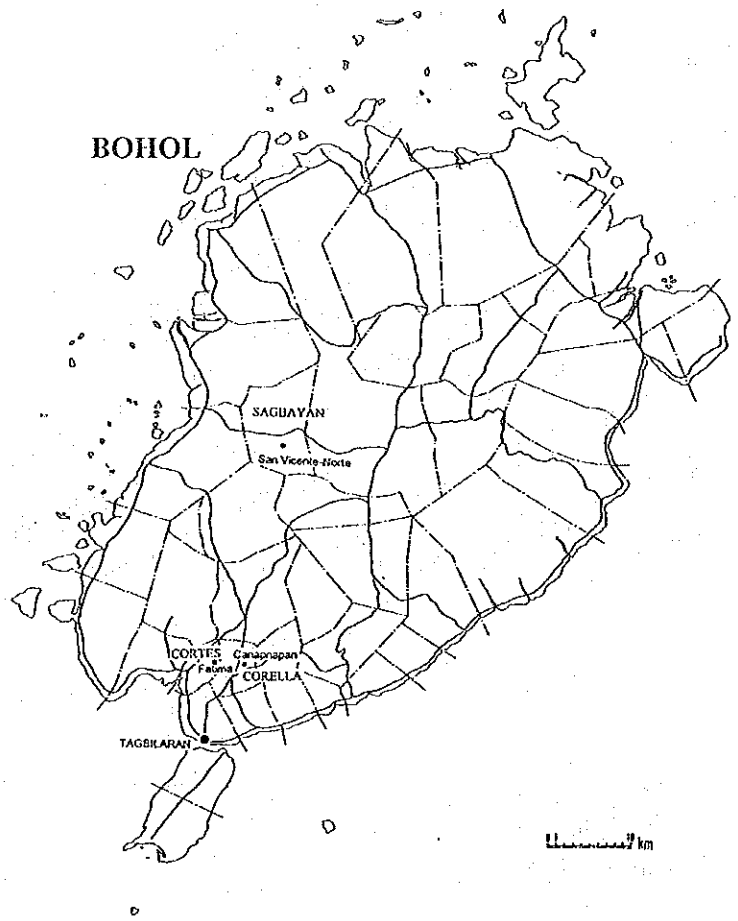


図３・５・１　ボホール島と調査対象バランガイの位置

ボホール島全体と今回の調査でかかわったコレリア(Corella)とコルテス(Cortes)、サグバヤン(Sagbayan)のミュニシパリティ(郡)の1980年の人口と世帯は表３・５・１に示すとおりである。同様に1990年の人口（推定）もあわせて示した。

表３・５・１　1980年のミュニシパリティ(郡)ごとの人口と世帯数

ミュニシパリティ(郡)	人口 1990	人口 1980	世帯数　1980
BOHOL	881,156	806,013	147,148
16.Corella　コレリア	5,617	5,197	1,096
17.Cortes　コルテス	9,904	9,350	1,814
37.Sagbayan サグバヤン	13,281	12,703	2,353

出所：NCSO(National Census and Statistics Office),
1980年センサス 1990年はNCSOの推定

この島からなるボホール州は、Region Ⅶの中央に位置し、47のミュニシパリティ［郡］(Municiparity)と１つのシティー［市］（タグビララン Tagbilaran）からなる。バランガイ［村］の数は全部で1,113である。1980年センサスでは、ボホールの人口は、806,013人と記録されており、Region Ⅶの全人口の22％を占めていた。同時期の人口密度は195.8人／haであった。人口は年率1.2％で増えていると見積もられている。ちなみに、1990年のボホール全体の人口は、881,156人(population projection)で、コレリアは5,617人、コルテスは9,904人、サグバヤンは、13,281人となっている。

農村人口は定住者総数の86％を含み、残りの14％は都市部に住んでいる。全人口のうち、24％の人はピリピーノを話すことができ、42％は英語を話すことができるが、スペイン語を話すことができるのは３％だけである。通常の会話はセブアノ方言でなされている。識字率は81.7％である。宗教では、ローマ・カトリックが圧倒的に多い。

（２）　経済的概況

農業は、州の主要な経済活動で、労働力の56％は農業労働力である。州の主要な作物は、米、トウモロコシ、ココナツ、それにウビ・キナンパイといった根茎作物である。農産物はほとんど島内で消費される。

各ミュニシパリティごとに栽培作物をみてみるとコレリアでは野菜とウビ・キナンパイといった根茎作物が主でカカオやコーヒー、ココナッツ、米、等が副次的作物である。コ

ルテスでは、根茎作物とココナッツが主作である。副次的には米とカカオがある。また、サグバヤンでは主要作物としてココナッツ、コーン、米であり、副次的には根茎作物等がある。

ボホール島のプロファイル・データでみる限り、3つのミュニシパリティでは灌漑などの基盤の整備が遅れているとみていい。これは米の需給状況にもあらわれ、データ的には信頼は低いが、ボホール島のプロファイルでは、コレリア、コルテス、サグバヤンはいずれも米生産が地域内自給できていない結果が示されている。しかし、コレリアではトウモロコシや野菜、果実では大きな余剰があり、他の地域に供給されている。根茎作物はコルテスが多くの余剰を出している。

家畜はほとんどが自給用で 1990 年1月現在の4半期毎に行なわれる財産目録調査では、水牛(carabao)は、56,768頭あり、このうち販売用は、160頭であり多くは自家用になっている（以下(　)内は、販売用）。bakaといわれる牛(cattle)は59,334頭(2,274頭)、豚は204,940頭(128頭)、採卵鶏は156,436羽(20,690羽)となっている。この他にヤギ、家鴨、ブロイラーなどが飼われている。

農業の他に、人々は生計のための収入源として商業や家内工業に従事している。家内工業製品は、地域の市場だけでなく、州外や他の国へも売られている。例えば、キャラメイ（c[k]alamay　コーンミールや米粉、キャサバ粉をココナッツミルクと砂糖で調理して甘いジャム状にしたもの）、ハンドバック、壁飾り、貝殻工芸、ラフィアヤシの葉の繊維から帽子やカゴなどを作る）、マット、ティーカップ、箒、木彫などである。

自然条件でも述べたが、なだらかに起伏する丘陵と低い山があり、ジュムリナやマホガニーなどの林産品を産している。サグバヤンでは集約的なジュムリナの単相林を植林している林家もみられる。

周囲を海に囲まれており、漁業も経済的に大きな役割を果たす。海岸をもつミュニシパリティの数は30あり、バランガイの数は354を数える。商取引される漁種はまぐろなど、海草や蛎、蟹、貝類なども豊富である。装備は簡単な沿岸漁業である。

(3)　ボホールのＲＩＣの活動

ボホール州の1,107バランガイのうち、243のバランガイにＲＩＣが組織されている。活動は1950年代から始まり、このうち半分ほどのＲＩＣで収入創出活動を行っている。現在、メンバーは女性で約７千名である。ＲＩＣの Officer の任期は１年で、毎年選挙で選ばれる。全てのミュニシパリティに連合（federation）があり、州には州の連合組織がある。

バランガイ・レベルで会費は取らない。おりおりの行事（美人コンテスト、クリスマスの飾り付けなどで資金を集める。ナショナルＲＩＣを通してＵＮＩＣＥＦ等からの資金を受けている。Corella では、ＵＮＩＣＥＦのファンドから1987年にバナナチップ生産のた

めに総額５千ペソをバランガイ・レベルで受けた。

ＲＩＣメンバーの特典として農家生活や収入創出活動に関するトレーニングを受けることができる（ローン等は行っていない）。このためにトレーニングニーズサーベイの実施やモデュールづくりを行っている。

ＲＩＣ以外にもバランガイ・レベルで活動している下記のような女性組織がある。

・Religious Organization of Women
・All Wives of Official in Barangay

● 地域の農業関係職員の活動概況

ボホール島全体のプロビンス[州]レベルでは、Agricultural Development Specialist １名だけである。もう一人青少年 Youth セクターの担当の職員がいる。ミュニシパル・レベルでは、農業事務所長 Municipal Agriculture Officer-MAO が１名と Agricultural Technologist が 平均２～３名いる。彼らは、形式的には、Farm（&） Home Research Management Technician であるが、Technician あるいは Specialist というよりも、ミュニュシパルのすべての農業の部局・組織を統括するジェネラリストとなっている。

（４） コレリア郡カナプナパン村（Canapnapan, Corella）とＲＩＣの活動

コレリア（ Corella）ミュニシパリティには、７つほどのバランガイがあり、コレリアは、小さい規模のバランガイの１つである。世帯数 107世帯、人口は 644人である。バランガイカウンシルのキャプテンが女性（ＲＩＣメンバー）であり、女性がキャプテンのバランガイは全国の平均で10％程度ある。彼女がキャプテンとして選ばれたのはＲＩＣの活動によりリーダーシップが培われたためであると述べていた。

20人のセクター代表（バランガイカウンシルに対するアドバイサリー的な役割を持っている）のなかで、女性が現在２名であり、一人は女性代表として参加している。

ａ．ＲＩＣの活動

ＲＩＣのメンバーは、現在34人。1968年に活動を開始した(写真13～15　参照)。発足当時のメンバーも多く残り、活躍している。若い女性たちは町に働きに出て、クラブのメンバーの高齢化が問題となっている。村のＲＩＣのリーダーは若い女性たちの雇用機会として農産物の加工場がほしいと考えている。現在の農産加工品はウビ、バナナチップ、キャッサバチップ、ウリ等である。これはコレリアのローカル・マーケットに出荷している。

ウビの生産状況は、個人レベルで行なっており、ＲＩＣが集荷を行っている。ウビの伝統的な調理法はゆでる方法と、ジャム（ウビ＋ココナッツミルク＋牛乳＋砂糖）がある。

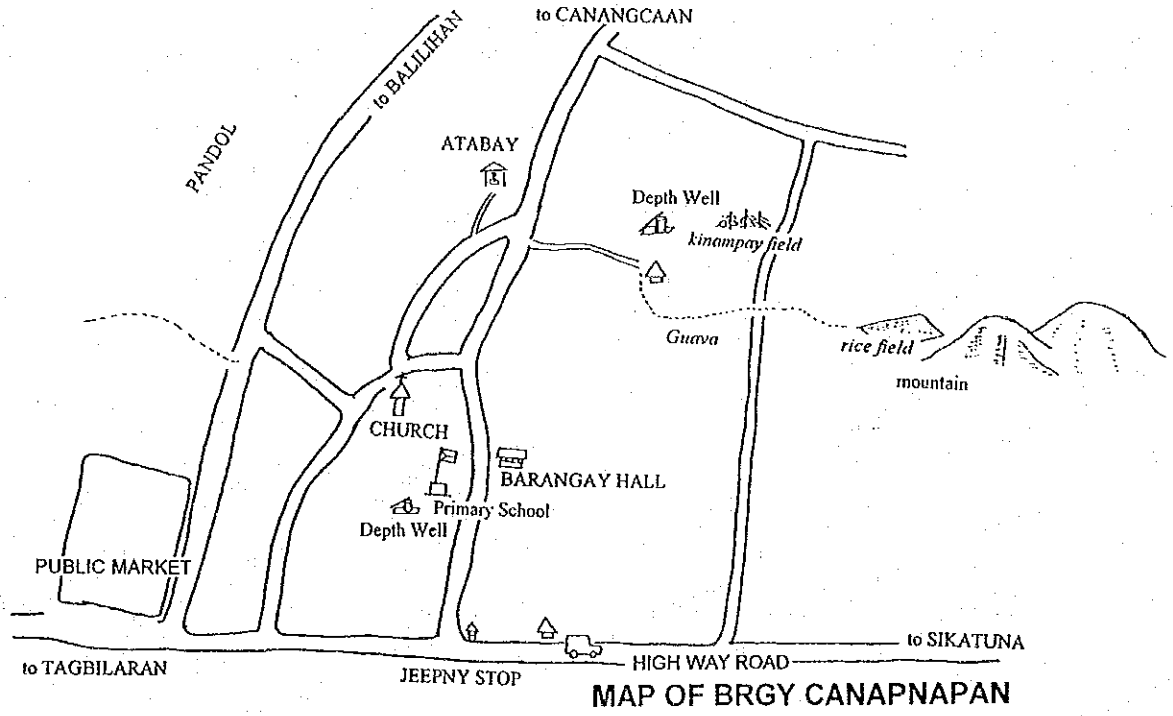


図３・５・２　カナプナパン・バランガイ　略図

ｂ．ＲＩＣの店とローカルマーケット

月曜日に開かれるコレリアのマーケットに「ＣＭＣＩ R.I.C-FARMERS COOP. Corella Bohol」という看板の店を出している。社会福祉開発省（the Department Social Welfare & Developement）から無利子の資本を年１万ペソ借り、メンバーは57人でそれぞれのメンバーが毎年 250ペソの会費を支払って運営している。店はＲＩＣメンバーが生産した米やとうもろこし、豚の飼料といった農産物とメンバーが日用品として必要な砂糖、様々な缶詰類、ミルク、ヌードル、たばこ、タンドアイ（ラム酒の一種）、洗濯石鹸、ソフトドリンク、お菓子類、肥料、調理用油などをまとめて購入したものを販売する店と簡単な食事ができる店を経営している。週１回、月曜日に市が開催されるが、メンバーが協力しあって運営しており、借入金は近いうちに全て返済できるといわれている。

この店は、生活協同組合（正式には「ボホールコレリアＲＩＣ農民組合」）として運営されている。ローカルマーケットに単に生活必需品を共同購入して販売するだけではなく自らの生産物を消費者に、場合によってはタグビララン市からくるバイヤーに販売することも行なっている(写真16～18　参照)。

(5) サグバヤン郡サンヴィセンテ・ノルテ村(San Vicente-norte, Sagbayan)と
ＲＩＣの活動

サグバヤン行政区のサンヴィセンテ・ノルテは、同行政区の西部、中心部の近くにあり、サグバヤンの町の中心部、ポブラシオンから２～３kmの距離にある。タグビララン市からは、52kmの距離にあり、ジープ、オートバイ、バス、トライスクル（３輪自転車：リンタク）、自転車を利用してタグビラランまでよくでる。

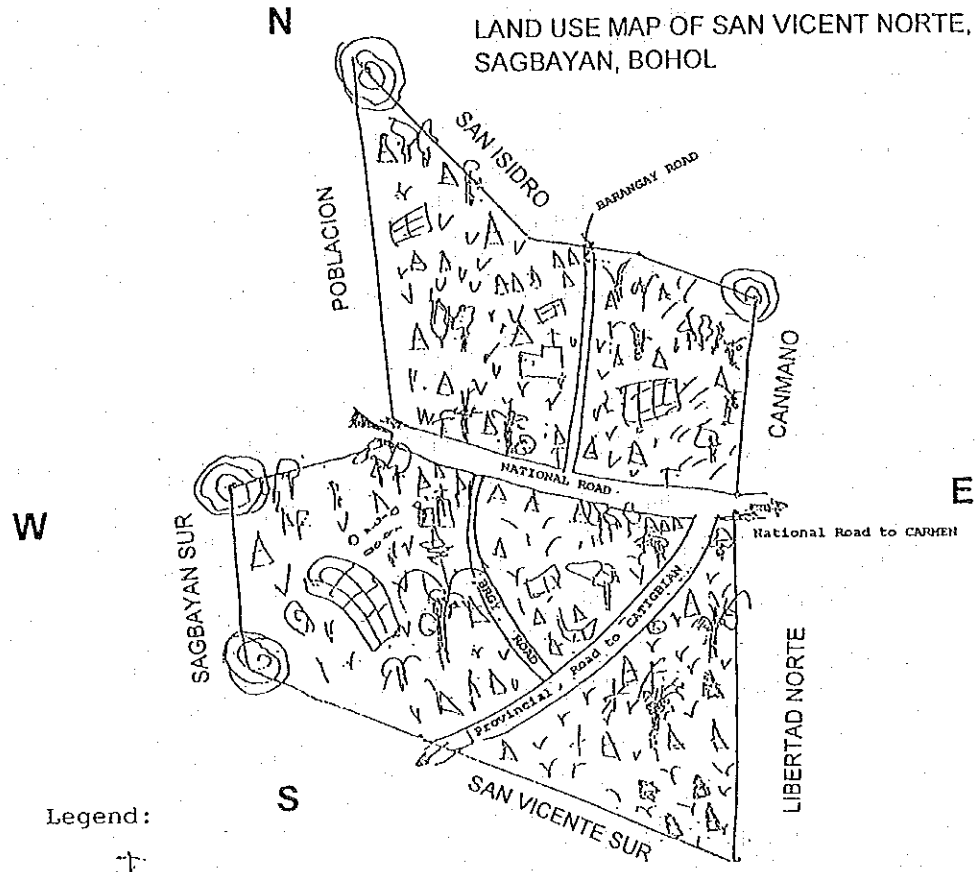
サンヴィセンテ・ノルテは、およそ359.26haの面積で、緩やかに起伏する丘陵、高台、山地をふくんでいる。その山は半球形でオワンをふせたような格好をしているので、カルメンの有名なチョコレートヒルの一部と信じられている。359.26haのうち、141.87haは農地、５haは林地、２haは居住地と表示されている。

老人たちによれば、このバランガイで栽培されていた作物はサトウキビとトウモロコシだけで、密生した林と並んで植えられていた。資料によれば、トウモロコシはバランガイの主要作物で、その他に小区画の天水田とココナツ・プランテーションがある。
1989年頃に、バランガイに電気が通じ、バランガイ全体に電燈がともることができるようになった。

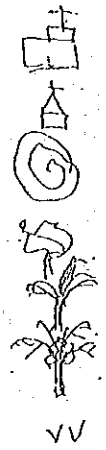
1990年現在、世帯数は 105世帯、人口 528人であり、農家数は79である。米やトウモロコシを主食にしている。

バランガイの中には、多くの社会組織がある。バランガイ・キャプテンのブエナベンチュア・ポリナール(Buenaventua A.Polinar:56歳)さんが加入している組織には、以下のようなものがある。

[加入組織と地位　Membership in Orgn.]
①Brgy.Captain　(1959年～現在)　バランガイ・キャプテン
②Board of Director of Association of Brgy.Council(ABC)バランガイ議会の評議員
③Member,Small Coconut Farmers Orgnization.　小規模ココナツ農民団体のメンバー
　Member,Farmers'Association　農民組合のメンバー
④Chairman,Brgy.Agrarian Reform Council(BARC)　バランガイ農地改革評議会の議長
⑤Farmer Secretary of Samahang Nayon(=village)　(Samahang Nayonは信用機関)
⑥President,Cooperative of Brgy.Service Point Officer
⑦President,Local Insurance Organization　地方保険協会の会長
⑧その他の組織
　1) ＲＩＣ - Adviser　ＲＩＣのアドバイザー
　2) ４Ｈ Club - Adviser　４Ｈクラブのアドバイザー
　3) Religions Organizations　宗教団体



Legend:



= Cemetery

= chapel

= slope/hills

= trees

= banana

= coconut

= corn

= vegetable garden

= cassava

= house

= DA office

= ricefield

= sala cot (kiosk)

= electric post

SOURCE:RRA(Rural Rapid Appraisal) Team Report for San Vicente Norte, Sagbayan, Bohol

図３・５・３　サンビセンテ　ノルテ　略図

● ＲＩＣの活動

バランガイでは、リタさんは、集落の保健係(Barangay Health Worker)であり、ＲＩＣのメンバーである。保健係の仕事は、主に集落の中年の女性たちが小児がいる家を訪問して体重計測等の看護婦の手伝いをするものである。

バランガイの北サンビセンテのＲＩＣの活動は、訪問したボホール島やマリンドゥケ島のグループと比較すると低調である。ＲＩＣの活動は、地域によって、程度に大きい差があることがうかがえる。メンバーは28人で構成されている。会費は５ペソ(約200円相当)で、そのうち１ペソはＩＤカード発行代金、２ペソはＲＩＣ全国組織に上納し、残りの２ペソがバランガイの組織の活動資金となる。

リタの所属するＲＩＣでは、養豚による女性の所得向上プロジェクトが1991年から行われ現在も続いている。このシステムは、あるＮＧＯの資金提供を受け、１頭の雌豚(sow)をＲＩＣ会員に配り、豚の仔(piglet)が４頭生れたら、３頭をＲＩＣに戻し、親豚と仔豚１匹が手元に残る。５頭の場合は、仔豚２頭と親豚が飼育した会員に残るシステムになっている。現在では、半数の14会員がＲＩＣの仔豚を飼っている。農業省はＦＴＩを通じて技術的な支援を行う。ＦＴＩは、資金的なサポートはしていないが、園芸作物の種子を配付すると同時に栽培方法の指導をする技術的支援をＲＩＣ組織を通じて行っている。

コレリアのＲＩＣの活動と比べてサグバヤンのＲＩＣは組織があるが、活発ではない。コレリアのローカルマーケットが週１回であるのに対してサグバヤンのローカルマーケットは週２回、開催される。規模はコレリアよりひとまわり程度大きく、豊富な洋服等の衣類、豚肉、様々な魚類、干し魚、菓子、雑貨類など豊富である。

(６) コルテス郡ファティマ村とＲＩＣの活動

コルテス・ミュニシパリティ(郡)にあるファティマ・バランガイ(村)は、世帯数が 129、人口、 302人（この説明では人口と世帯の規模が小さい。平均で６～７人であるといわれるのでどちらかの数値が間違っている。確認をしたが、訂正はされなかったのでこのままの数値を使用する）であるという。このバランガイには以下の組織がある。

① Farmers Association　35人
② ＲＩＣ
③ ＰＴＡ
④ Bio Intensive Gardening Programme
⑤ Ubi-Kinampay Growers Association （農地改革省管轄）
⑥ Youth Organization
⑦ Health Workers Association

バランガイホールが Primary health Center（ＰＨＣセンター）、ＲＩＣセンターと兼用されている。

主食となるのはコメ、トウモロコシ、ウビ（キナンバイ、ホワイト）などで、他に、ガビ、キャッサバ、サツマイモなどの根茎類と、ココヤシ、ピーナツを生産している。野菜としては、ナス、ササゲ、オクラ、ウリ、カボチャ、ニガウリ、サツマイモの葉、キャッサバの新芽、ラディッシュ、ニンジン（新しく導入している）などである。農民の主な収入源となる販売作物は、バナナ、ココナツ、ウビ・キナンバイである。

家内工業（手工芸）も発達していおり、ニト Nito（Lygodium japonicum）、ブリ Bure（Corypha elata）、ココナツの葉の芯部（Coconut midleaves）、竹などの材料を用いてマットや篭や飾りなどを作る。

ａ．ファティマのＲＩＣの活動

メンバーは28人（うち男性は２人。いずれもメンバーだった妻が死亡したため加入）で、会費は１人当たり月に５ペソである。週に４回、会合と活動がある（写真22～23　参照）。ウビの栽培は、６月に植えて12月～１月に収穫する。ＲＩＣの28人のメンバーで約 60ha 作付けしている。ウビの販売は、タグビラランやその他の地域から、塊茎を買いにバイヤーがやってくる。価格は１キログラム当り、収穫期は15～20ペソ、端境期は30ペソである。その他に、さつまいも、キャッサバ、ピーナツも生産している。

農業生産以外にも、食事の準備を引き受けたり（catering service）、ココナツオイルから石鹸づくり（科学省）などの活動により収入を得ている。30個のココナツから２㍑のオイルが採れる。

ｂ．Bio Intensive Gardening Programmeについて

メンバーは40人（うちＲＩＣメンバー5人を含む）。保健省（Depertment of Health）、農業省（ＤＡとＡＴＩ）がＵＮＩＣＥＦと協力して、実施中のプロジェクトで、栄養不良の子供を持つ世帯40世帯が参加し、目的は母子の栄養状態の向上である。

具体的には、５×５ｍの区画の土地に柵で囲い、その中で多種の作物を作っている（写真24　参照）。マロンガイ（ワサビノキ）、パパイア、オクラ、ササゲ、ウリ、カボチャ、ピーマン、ニガウリ、ピチャイ（葉菜）などを、１年を３期に分けて栽培している。

また、有機肥料利用の促進し、より安全でおいしい農業生産をめざしている。ウビ生産も促進しており、40世帯で10､000ペソの生産。生産のための種芋を１世帯当たり9.75kgもらえる。

６．女性が支える基本的生活のための農林業
―ボホールにおける資源観調査結果―

本節では、ボホール島で行なった、農村女性が自らの基本的生活を持続するための農林業活動を資源としての活用を調査した結果を述べる。短期間の調査では、十分な資料を得ることはできないが、それでもジェンダー的な視点を配慮してデータ収集することによってこれまで見ることができない地域の資源の活用の仕方を把握することができる。

（１） 調査の目的と方法

この調査の目的は、対象地域の人びとがどのように生活を持続させているかを把握するものであり、開発の当初では、最も重要なデータとなるものである。開発の０時点としての基本的データであり、開発によってどのような生活に組み替えられていくのか、現在の基本的生活の利点をも考慮して、生活改善していくことを検討する出発点である。

所得創出をして生活を改善していくこともあり、所得創出だけで生活改善がなされない場合もある。国内の生活研究の成果では、地域資源をテーブルにのせることが、その地域固有の生活が維持でき、それは、現金だけでは、入手できない最も基本的な生活資源である。

女性たちが、どのように工夫をしてそのような資源を確保して生活を持続させているのかを捉らえることがまず第１歩となる。

ａ．調査の方法

調査は、現地普及スタッフとともに地域資源を利活用している１人の農村女性の指示する資源のリストアップを行なう方法によって行なった。１人の生活者という主観的な方法を用いている。

ｂ．調査地域

短期的な調査のため官団調査団の行なったボホール島とマリンドゥケ島の中からボホール島を選定した。ボホール島はフィリピンの南部に位置し、言語もセブアノ（ヴィサヤン）語圏である。タグビララン市の近郊にこの調査を行なったコレリア(Corella)郡カナプナパン(Canapnapan)村とサグバヤン(Sagbayan)郡サンビセンテ－ノルテ(San Vicente-Norte)村がある。前者のカナプナパンは、ＲＩＣ（農村改善クラブ）が活躍している村である。ＲＩＣの活動が活発な地域とそのコントロールを含めてＲＩＣの活動のない、あるいは、活動が低調な地域を選択することにした。サンビセンテ＝ノルテ村は、ＪＩＣＡが援助協力をしているボホール農業振興センターの専門家、スタッフの協力を得て選定した。

c．インフォーマントの選定

この種の調査は調査対象者（インフォーマント）のあり方が結果を大きく左右してしまう。今回は、カナプナパン・バランガイのＲＩＣのリーダーを対象にした。リーダーは、60歳の女性で、69歳の配偶者と２人の子供と暮らしている。８人の子供を生み育てた母親である。この家は1.5～2.0ヘクタールの農地を所有している。

（２） ２つのバランガイ―対象地域とインフォーマント―

調査対象地域としてＲＩＣの活躍している地域と活発ではない地域について生活の状態をみるために簡易な調査を実施した。ＲＩＣの活躍するバランガイ（村）として Corella 郡(MUNICIPALITY)のカナプナパン村を、ＲＩＣの活動が活発ではない地域としてSagbayan郡のサンヴィセンテ・ノルテ村を選定した。

a．カナプナパン・バランガイのインフォーマント

インフォーマントととなったのは、カナプナパンＲＩＣのリーダー、アドルファ・アパレさんで、カナプナパンのバランガイ・キャプテンでもある。彼女は、バランガイＲＩＣのプレジデントであると同時に、コレリアのＲＩＣ連合（federated）のプレジデントでもある。

彼女の家族は、10人でカナプナパンに同居するのは現在は４人となっている。その他の家族は、香港に１人、マニラ市に１人、隣のセブ島に３人、この島のタグビララン市に１人である。いずれも技術的な仕事に従事している家族員が多い。現在は、タグビララン市のデパートの会計をしている長女(35歳)と同市の大学に通っている五男(23歳)が同居している。

アドルファさんが夫のシミオンさん（Simeon 当時35歳）と結婚したのは25歳の時であり、二人ともカナプナパンの生れである。近所で子供の頃からよく知っていた。結婚した当時は、夫の母親（未亡人）の所に３人で住んでいた。

アドルファさんは、タグビララン市の企業に自家農業をしながら勤務していたが、退職してＲＩＣの活動を行なっている。現在では、夫とともに農業を営んでいる。農地面積は約 2.0ha、一箇所にまとまっているのではなく、それぞれ分散している。そのうち、所有地は４分の３で、夫の父親から相続した。残り４分の１は夫の親戚（従兄）から借りている。

トウモロコシが主要作物で約1.0ha栽培している。収量のほとんどは自己消費しているが、販売に割当てる部分もある。コメは、0.125ha。ここには潅漑はないので、降雨に頼っている。だいたい自給できるくらいの生産はあるが、ときどき不足し、買っている。

インフォーマントの家族１　　Canapnapan Corella　BOHOL PHILIPPIN Nov. 22/1993

関　係	氏名	性別	年齢	同居	既・未婚	備考
本　人	Adolfa Apale	女	60	同居	married	RIC Leader,Barangay Counsilor
配偶者	Simeon Apale	男	69	同居		
長　女	Maria Elvira	女	35	同居	single	Tagbilaran市,アパートの経理
長　男	Felipe Apale	男	33	別居	married	Tagbilaran市,農業振興センター
二　男	Gerardo Apale	男	31	別居	single	Manila市,民間会社エンジニア
三　男	Hermes Apale	男	30	別居	married	香港,会社員(エンジニア)
二　女	Maria Evelyn	女	26	別居	single	Cebu島,会社員(時計製造)
四　男	Ricardo Apale	男	25	別居	single	Cebu島,リクルート中
五　男	Justino Apale	男	23	同居	single	Tagbilaran市通学 学生
三　女	Maria-Fe Apale	女	21	別居	single	Cebu島,リクルート中

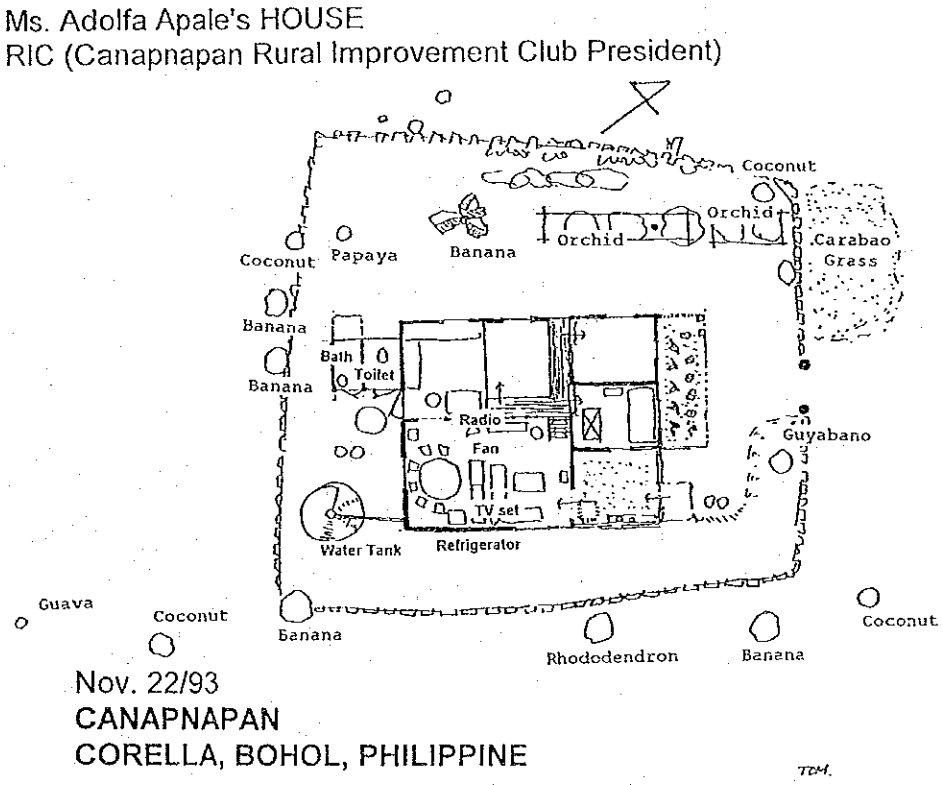


図３・６・１　カナプナパン Ms.Adolfa Apale's House

トウモロコシとコメが主食だが、その他に根茎類（ウビ、サツマイモ）とバナナ（生食用のサギンSagingの他、蒸かしたり油で揚げて食べる種類もある）が代用される。

野菜は、ササゲ（string beans）、ナス（eggplant）、キュウリ（cucumber：塩、酢、コショウとまぜてサラダにする）、sweet gourd、などである。

果樹は家の周りに植えており、グヤバノ（guayabano）、ランソネス（lanzones）、グアバ（guava）、柑橘類（citrus）、ジャックフルーツ（jackfruit）、マンゴ（mango）などである。ココヤシはもちろん、カカオとコーヒーも植えられていた。飼育されている家畜は、水牛１頭、牛１頭、豚３匹（雌豚１匹、肥育２匹）、鶏40羽以上である。

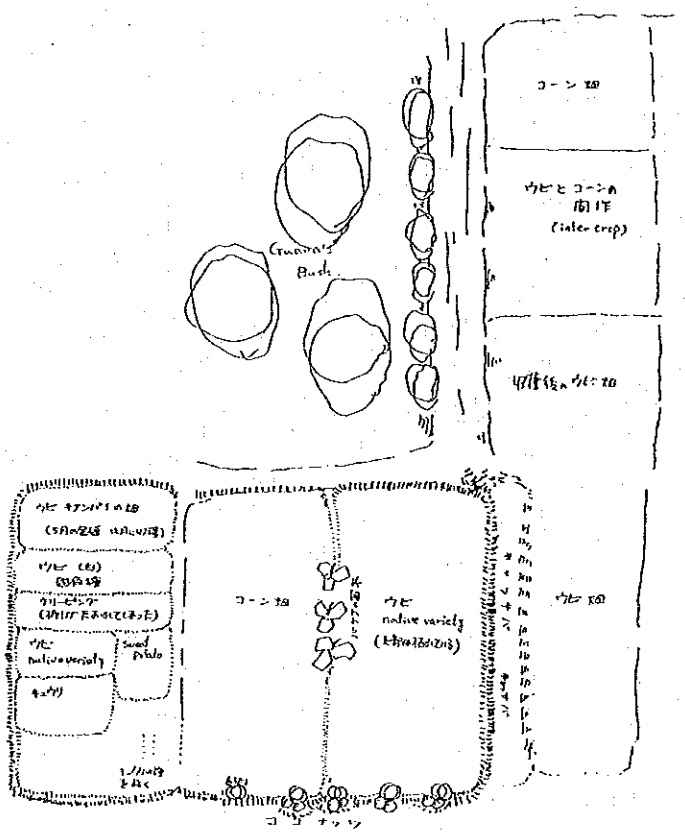


図３・６・２　Ms.Adolfa Apale's Vegetable Field

表３・６・２　インフォーマントの家族２

Canapnapan Corella　BOHOL PHILIPPIN Nov. 22/1993

関　係	氏名	性別	年齢	同居	既・未婚	備考
本　人	Susana Talisic	女	66	同居	married	RIC Member
配偶者	Diego Talisic	男	64	同居		資源省のラタンプロジェクトに勤務
長　女	Fe Lao	女	39	同居	married	Corella選挙管理委助手
長女の夫	Portik Lao	男	41	同居		
長女息子	Dexter Lao	男	13	同居	single	
長女の娘	Zarina Lao	女	11	同居	single	
長女息子	Joville Lao	男	8	同居	single	
長女の娘	Mariz Lao	女	6	同居	single	
本人の娘	Simie Talisic	女		別居	single	

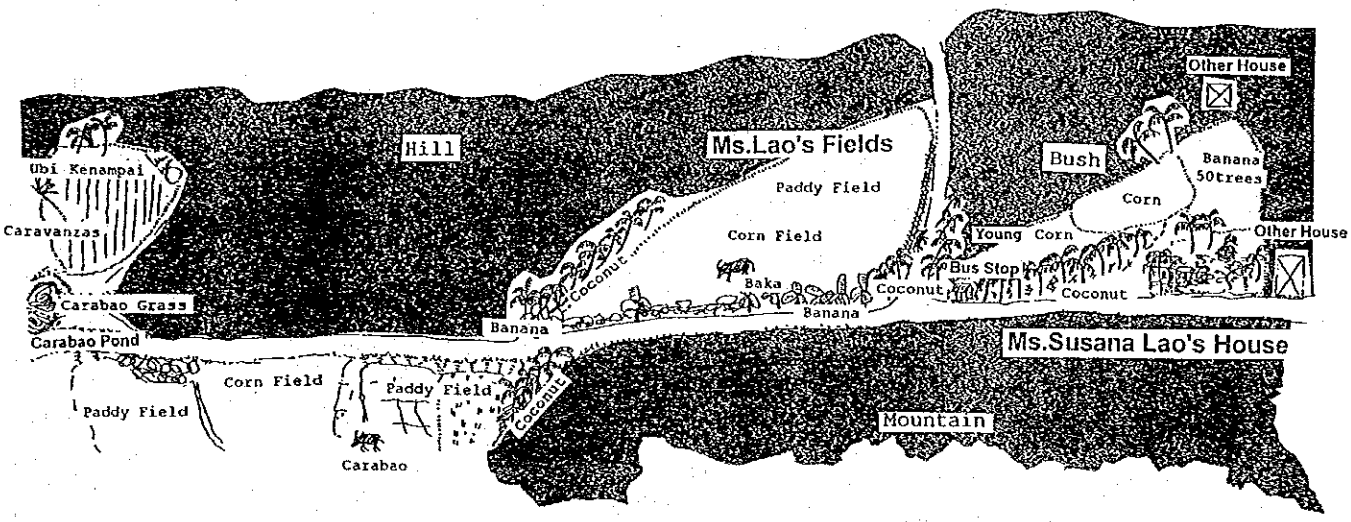


図３・６・３　Ms.Susana Talisic's House and Sorroundings

もうひとりのインフォーマントは、スサーナ・タリシック Susana Talisic さんでやはり、ＲＩＣのメンバーで皆からスーサイと呼ばれている。同居している彼女の娘（Fe Lao）によれば、家族は以下の８人である。

スーサイさんの家は1.0haの農地を所有しており、コメは、潅漑はなく、天水田である。自家消費だけで販売はしていない。トウモロコシもつくっておおり、これは販売している。

家畜は、水牛１頭 、牛２頭 、豚（雌豚１匹）、鶏は多数いる。

スーサイさんの娘、フェさんの１日の生活をおってみよう。

起床は、4:00～5:00で、朝食の準備にかかる。調査期間中は、母親が朝食をつくっていた。フェさんは、自分の子供の世話をする。子供は、学校に通っており、6:30に家を出る。学校まで、徒歩で２kmある。7:00もなると朝食で、7:30から17:00までコレリアのオフィスで選挙管理委員会の仕事をする。オフィスまでは、モーターサイクルかジプニーで通っている。21:00になると学校に行っている子供は寝る。

家事であるが、家にいる者が料理をすることになっている。ときには母親、夫もする。休みの日には子供と一緒に農作業をする。普段は、母親、父親、夫が農業をしている。犁耕（plow）は男の仕事で、水牛は男の友達（man's friend）といわれている。田植え（planting）や収穫は家族皆でやる作業となっている。家畜の世話は母親がするが、調査期間中では水牛と豚の世話をフェさんの夫がしていた。

b．サンヴィセンテ・ノルテのインフォーマント

サンヴィセンテ・ノルテでは、バランガイ・ブロック長の妻、リタ・イティングさんがインフォーマントである。家族は、カナプナパンの２人よりも少なく、本人と夫と２人の息子の４人である。27歳になる、長男は、船員でアジアの各地に航海をしている。夫も独身中は、船乗りであった。インドネシアやニューギニア方面に航海に出たが船が沈没したのを契機に船乗りを辞め、リタさんと結婚をした。

表３・６・３　インフォーマントの家族

San Vicente-Norte Sagbayan BOHOL PHILIPPIN Nov.24/1993

関　係	氏名	性別	年齢	同居	既・未婚	備考
本　人	Lita Yting	女	48	同居	married	RIC Member
配偶者	Maximino Yting	男	51	同居		San Vicente-Norte で生れる
長　男		男	27	別居	married	船員　アジアの各地に航海中
二　男	Felix Yting	男	16	同居	single	高校学生

農地を７haもつ地主である。土地は夫がその父から相続したものである。夫には４人の姉妹がいたが、農地を分けてはいない。家からは１kmほど離れたところにある。ココナッツ、米、コーン、コーヒー、バナナ、タロ芋、ヤム芋といった農産物に加えて、竹やマホガニー、ジュムリナ、イピルイピルといった林産品を育てている。米が作れる土地は１～２haほどで、潅漑はなく、天水田である。二期作を行なっており、１期目は、10月から２月、３月までと、２期目は、５月から10月までの、年２回である。この地方の乾季は10月、11月からで、雨季は４月、５月からである。収量は１haから50カバン（１カバン＝40

kg)。うち 40カバンは販売し、10カバンを自家消費している。販売価格は籾(palay)で1カバン200ペソである。

トウモロコシを1ha栽培している。1月に種をまき、3ヵ月後に収穫する。1haからの収量は90カバン。自家消費だけでなく、販売もしている。サグバヤンのマーケットに持っていってバイヤーに売る。

ウビとカモテ（サツマイモ）を小面積、バナナを200本、栽培している。これらはコメとトウモロコシの代替食になる。野菜は、マロンガイ（Malunggay ; Horseradish tree：小さな木で、葉と実を野菜として利用）、ナス、カンコン（Kangkong；よう菜：湿地に生えるヒルガオ科の蔓性多年草。作物としては一年草で、柔らかい茎と葉を食用にする）、Alugbate(不明)、ガビ、スウィートペッパー（ピーマン）、ホットペッパー（トウガラシ）などである。

家畜は、牛（Baka）を現在2頭飼育している。1頭は繁殖雌牛で、1頭を肉用として肥育して売る。また、繁殖用豚1匹も飼っている。鶏100羽を他の農民に分散預託（under dispersal）しており、売上げは小作と折半している。ヤギ15頭をやはり預託に出している。肉用として大きいものは500ペソ、小さいものは200ペソで、肉屋へ売る。

闘鶏を12羽屋敷地で飼っている。サグバヤンの闘鶏場は日曜日（毎週ではない）に開かれる。カラバオは飼っていない。耕起は、カラバオと農民を雇って犁で耕す。支払は1日70ペソと3回の食事を出す。

現金収入はもっぱら週2回開かれるサグバヤンの公設市場にあるサリサリストアの売上が占めるようである。この店は1975年に始めた。9時から5時まで店で働く。「人がいれば5時に店を閉じなくてもいいとは思うが、夕食の支度があるので閉めなくてはならない」とリタはいう。

農場へは、草とりや圃場の掃除にときどき出かける。農場の仕事は常時2人の雇人がおり、植付けや耕起、除草等の仕事をしてもらっている。1日の暮らしは、サリサリストアに出る1日のものである。また、国道に面した家では民宿のような仕事もしており、現金収入をいろいろな形でえているのもこの家族の特徴である。

家庭電化製品も日本製のものを中心にテレビ、ミニステレオなど船員の息子が持ってきたものがおいてあり、近所の子供たちがテレビをみに集まっている。

おおよその1日の仕事は、表に示したとおりである。燃料にするマキは夫が農場から運んでくれる。共同の深井戸が家に隣接してあるが、水汲みも夫がしてくれる。ときどき二男がしてくれることもある。

インフォーマントのリタは、ニックネームでマリアリリア・イティングというのが正式の生である。彼女は、1945年にイナバンガのコンビトーンという集落で生れた。姉妹が4人、兄弟が2人、死んだキョウダイが1人いるので全部で8人キョウダイの5番目である。学校へは、小学校の3年生まで通った。彼女が小さいときに、父親が早く死んでしまい、

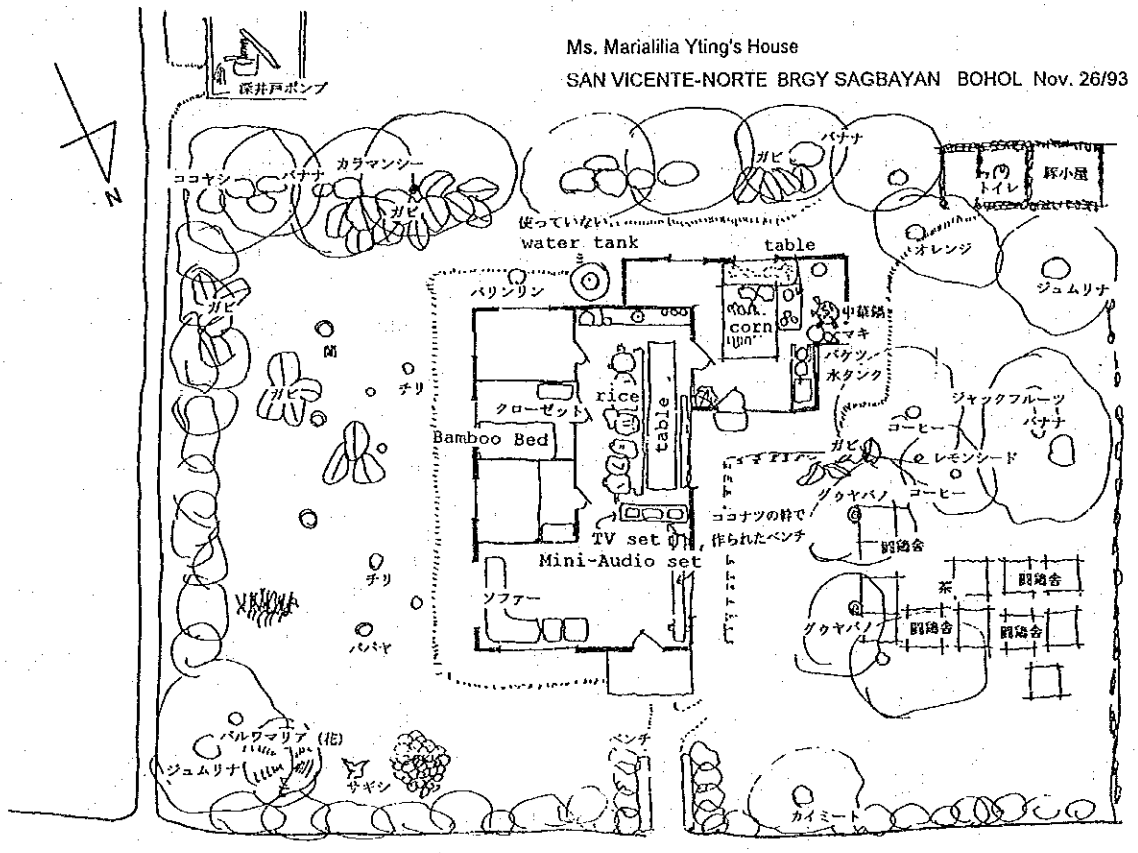


図３・６・４　Ms.Marialilia Yting's House

表３・６・４　夫婦の生活時間

時間	妻	夫
5:00	起床 水浴びして身体を洗う	起床 家畜の世話（闘鶏と豚に餌やり、牛に草を食わせる） 洗濯は妻と分担、夫婦の洗濯物は一緒に洗う。（水浴び、水汲み）
6:00	朝食の準備	
6:30		朝食
7:00	朝食	（息子が学校に行く）
7:30	住宅や家の周りを掃除	朝食後、自分の畑に行く
9:00	夫と市場に出かけ（市が開かれているとき）、サリサリストアを開く。サリサリストアでは雑貨を売っている。	
11:30	昼食。ランチボックスを持参して店で昼食をとる。	家に帰って、朝妻が用意してくれた昼食を一人で食べる。妻は rent shopへ、息子は高校へ行っている。ライスとおかず（魚、ギナモス、野菜）。 休憩（昼寝）は15分くらい。 畑に戻る。
12:00	サリサリストアで仕事	
17:00	帰宅	帰宅。夏は日が長いので、もう少し遅くなる。
17:15	夕食の準備を開始	
19:00	夕食	夕食
20:00	テレビを見る	テレビを見る。ニュースを聞く。
21:00	就寝	就寝

出典）面接調査による

学校には行かせてもらえなかった。1963年、18歳になる前にマキシミノ・イティングと結婚をした。18歳の結婚は、農村では普通で（彼女は17歳で結婚したことを強く主張した）、15歳くらいから結婚をする人がいる。現在まで隣のセブ島に出かけたことはあるが、ボホール島を離れて遠く、マニラにもいったことはない。今度、長男が日本からの航海で戻ってくるときにマニラに会いに行くことになった。今までマニラにもいったことはないと語っていた。

農作業における男女の作業分担についてボホール島の一般的なものをきいた。

表３・６・５　男女の作業分担

作業	性別	備考
plowing（犁耕）	男	女はアシスト
harrowing（まぐわでならす）	男	カラバオを使う
planting（播種、定植）	男女	
weeding（除草）	男女	
fertilizing（施肥）	男女	
harvesting（収穫）	男女	
storing（貯蔵、収納）	男女	

出典）面接調査による

(3) 女性が重視する地域の生活資源

表3・6・6は、Ms.Adolfa Apale が、リストアップした資源リストである。これは、インフォーマントが、日常生活する自宅と農地、その周囲の空間にある生活で使用する資源を列挙したものである。調査者と地域の農業技術者がインフォーマントとに従ってついて歩き、インフォーマントの日常空間からリストアップしたリストである。インフォーマントが指し示す資源を調査者がポラロイド写真に撮影し、その場でつくられた写真に現地の農業技術者がその土地の資源の呼称と英文名を写真に記録してこれをカード化して整理したものである。これを「地域資源カタログ」と呼ぶことにする。

フィールドでの作業は、この資源カタログにもとづき模式的な地図を作成し、資源の分布を住居を中心にプロットした「資源マップ」を作成する。そして、この地域資源カタログをもとにインフォーマントの生活での利用方法を農業技術者のフォーローを受けて記録していく方法をとった。時間がなかったために今回はできなかったが、同一方法による男性の「地域資源カタログ」を作成し、「資源マップ」に落としていく作業があることが望ましい。

このようにして作成した「地域資源カタログ」、「資源マップ」から以下のような特徴がいえる。

a. 地域利活用資源の多様性
b. 単一資源の多用途的利活用
c. 自給用資源と換金用資源の併存
d. 暮らしに変化を与える資源の組合わせ
e. 医薬に用いる資源
f. 住生活に利活用する資源
g. 伝統的な農耕具と資源

a. 地域利活用資源の多様性

ボホール島での調査からまず第1番目にあげる特徴は、女性が重要視する資源が多種多様であることである。まず、キュウリ(31)、シロウリ(30)、ナス(27)、ヤム芋(24)、タロ芋（日本の里芋の一種）、インゲン豆(28,29)といった野菜類があげられる。そしてバナナ(06)、マンゴ、パパイヤ(13)やグゥヤバノ(14)、スターアップル、グゥアバ、パイナップル等の多種の果実やココナッツ(02～05)、豚や鶏(36)、牛(34)といった家畜等の食料資源がある。また、これらに加えて味付けにつかうトウガラシ(32)、ショウガ(33)やレモングラスの類い(38)、ローカルな香辛料で Balilikid(39)、料理に着色をする Achute(37)という植物等食生活を演出する小道具がある。そして、マホガニー(Mahogany,43)やジュムリナ

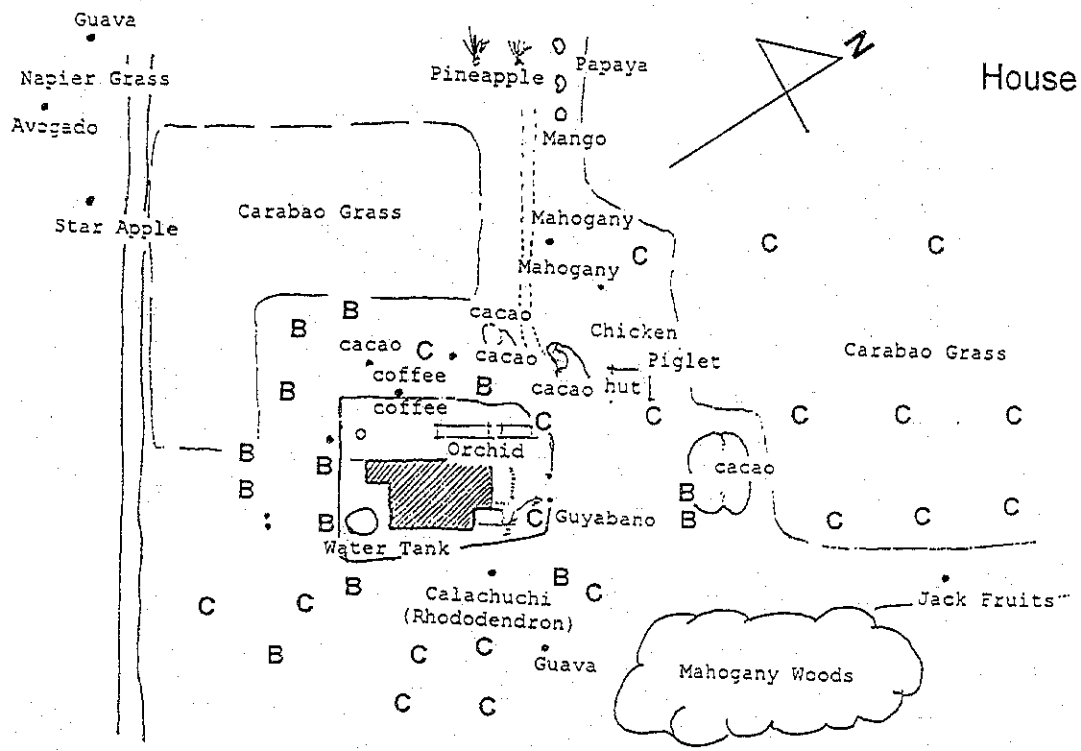
表３・６・６ LOCAL RESOURCES IN BOHOL ISLAND

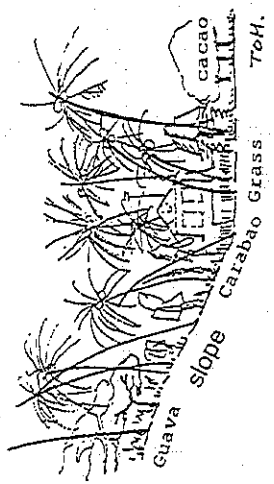
LOCAL RESOURCES IN BOHOL ISLAND BY WOMEN

Ms. Adolfa Apale Canapnapan Balangay Corella, BOHOL

Card No.	Items	Comment
01	Ms. Adolfa Apale and Her husband	our informants
02	Coconut	
03	Coconut Midribs	
04	Coconut Leaves Products	
05	Coconut Tuba	
06	Banana Plant	
07	'Raft'	use banana trank
08	Cacao Plant	
09	Cacao Product (Tabliya)	
10	Coffee Plant	
11	Carabao Grass (Lakatan)	
12	Guava (Biyabas)	
13	Papaya	
14	Guayabano Plant	
15	Jackfruits (Langka)	
16	Star Apple (Caimito)	
17	'Pitogo Palm'	
18	Avocado Plant	
19	Pineapple Plant (Piña)	
20	Napier Grass	
21	Napier Grass	erosion protect
22	Corn	
23	Rice Planting	seed bed
24	'Kinampay'	'Ubi', purple yam
25	Root of 'Kinampay'	
26	Sweet Pepper (Astal)	
27	Eggplant (Talong)	
28	String Beens (Batong)	
29	String Beens	
30	White Squash (Tambaliyoung)	
31	Cucumber (Pipino)	
32	Hot Pepper (Sili)	
33	Ginger Plant (Luy-a)	
34	Cow (Baka)	
35	'Carabao'	
36	Native Chicken (Manok)/ Piglet (Backtin)	
37	'Achute'	Coloring foods
38	Citronella Plant (Tanglao)	
39	'Balilikid'	a spice
40	'Helba'	a medicinal grass
41	'Tog-Tog'	a medicinal grass
42	'Gmelina' trees	
43	'Mahogany' trees	
44	Bamboo	
45	Rattan (Uway)	
46	Salago (Siapo)	paper materials
47	Forest	
48	'bolo'	local knife
49	Wooden digger	
50	Wooden mortar/pistle	

' ', ( ) Cebuano(Visayan) or Tagalog, local language





Nov. 22/93
CANAPNAPAN
CORELLA, BOHOL, PHILIPPINE

C : Coconut tree
B : Banana

informant: Ms.Adolfa Apale
interpreter(Extension Staff)
Ms.Artemia A. Gotardo
Ms.Oferia A. Sanchez
(ATI,Bohol FTI)

図３・６・５　屋敷周りと有用植物

(Gmulina,42)といった木材、紙の原料になる Salago(46)や生産手段の畜力としての水牛(Carabao,35)、生産用具の掘り棒(Wooden Digger,49)、土地の木材でつくった杵と臼(Wooden motar/pistle,50)、Helba(40)や Tog-tog(41)、と呼ばれる薬草等、生活に欠かせない資源が多種多様に存在しており、それを認識して自由に利活用している。

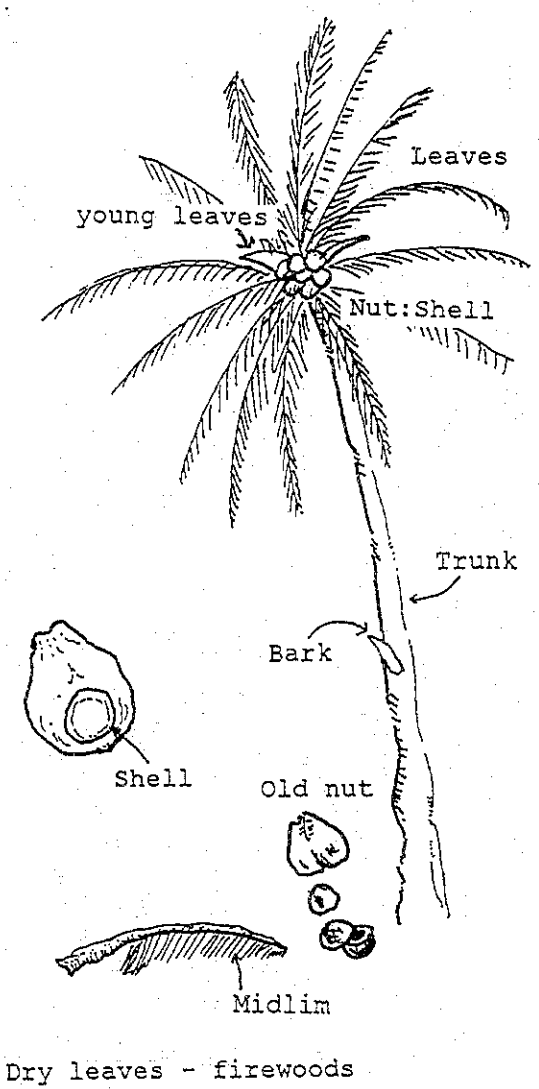
b．単一資源の多用途的利活用

暮らしの中で使用される資源は、多方面に使用される。その典型例がバナナであり、ココナッツである。バーバラ・トーマスースレイター等はＵＳＡＩＤの資金を得て、レイテ島のフィールド・ワークによってバナナ・パームの多用途的活用の実態を示しており、それがなおかつジェンダーによって異なる用途が存在することを明らかにしている(Barbara Tohmas-Slayter and M.Dale Shields,1993,Tools of Gender Analysis; A Guide to Field Methods for Bringing Gender into Sustainable Resource Management,Clark Univ.)。ここでは、独自のフィールドワークからアドルファ・アパレとフィリピン政府現地スタッフにより示されたココナッツの例をみてみる。

図３・６・１に示したように、ココナッツの用途は非常に多様である。古い果実と新しい果実が区別され、新しい果実は Boku と呼ばれ、このジュースはマニラでもBoku Juiceとして若いことが強調されて販売されている。ココナッツは単純に果実ではなく、バナナ同様、野菜としても食卓に上る。old nut あるいは mature nut (熟したナッツ)と称される果実は、乾燥の度合いが高いものを copra といい、油脂分をとったり、それを石鹸の材料にしたりする。生のものは、豚の飼料として活用し、樹木の幹(trunk)は、住宅を建築する際の材木になる。葉は、簡易につくった家屋の壁材、日除け、屋根葺きに用いられている。葉の芯部は、ツマヨウジ、ホウキの穂先に使用する。若い葉は poso という飯篭をつくるのに使用しており、これを英語で hunging rice と表現している。 poso は、若い葉を、四角錐を２つの底面であわせたよう形に編みあげ、その中に生米を入れて炊く。それを腰にぶら下げて持ち歩き、山での仕事等の弁当となる。poso は、ローカル市場にも出され、換金化することもできる。若い葉は、鳥や眼鏡、パイプ等に模して編み、幼児のおもちゃにも用いる。

ココナッツに覆っている外被を shell と呼んでおり、これも用途が豊富である。釜で焼いて炭として使用し、これも換金できる資源である。家屋の装飾にも使用し、衣服のボタンの材料として日本にも輸出されている。中身を削り、楽器のウクレレにして用いる人もいる。半分に割ったシェルは廊下を磨き上げる掃除道具でもある。

ココナッツの樹木の樹皮(bark)を、刻んで熱湯に入れて煎じて化膿止めの医薬品になる。男性が特につくるのに余念がないのが、tuba である。これは樹高の高いところにあるココナッツの新芽に切れ込みを入れて竹の管を被せて放っておくと10日位でできる自然発酵酒で英語では coco wine と呼ばれている。水は全く加えない。これを胃腸薬に用いるときも



Various Uses in Coconuts and the Tree

Fruits		Juice "Boku" : Young Coconut Juice
Nuts	Young Nut	food
		vegetable
	Old Nut (dri copra)	coconut oil
	(Mature Nut)	soup
Coconut Water		dextrose
		nata de coco
		vineger
		candy (coconut milk)
Raw Materials		feeds for pig
Trunk		lumber (building a house)
Leave		walling
		hat of roof
		shade
	Young Leaves	"poso"
		toys for childrec
		"chuba" (coco wine)
Midlim		toothpick
		broom (3.5 peso 1 bundle)
Shell		charcoal
		decoration
		buttom
		"ukelele" (musical Insrument)
Bark		castration (medicine: chopping hot water)

図３・６・６　多用途利用

あるという。ココナッツの新芽はスペイン語でパルミット(palmito)と呼ばれ、サラダにして食される。豚の飼料にこのココナッツの葉の新芽が供される。また古い枝と葉は、燃料としてもいい材料になっている。

このようにココナッツは暮らしの中で非常に多用途に使用されていることがわかる。ナタ・デ・ココのように油脂分だけを使用したり、ココナッツジュースといった部分的な使用だけでは廃棄する部分が多くなる。地域の暮らしと一体になった資源ということができる。このような資源の植付けから廃棄するまでの過程と地域の生活による利用とを結び付けたその土地固有の利活用方途を土地利用、廃棄量等の生態的な循環系としても把握し、地域の生活、資源、生態系等の全体的なデータとしての掌握が開発前の調査の段階で必要になってくる。資源の利活用とそれぞれの利活用で不用になる部分によって形成される暮らしの価値観は異なり、生態系を考慮した暮らしに利活用する資源のサイクルを記述しておくことが重要である。このような多用途の利活用がなされる資源を大規模単一換金作物生産の圃場を整備する際に大規模に伐採する際には、特に注意を要する。炭は他の資源で補えるのか、その代替品は安価であるのか、それらの商品にアクセスが容易であるのか。地域の生活を克明に調査して開発当初の一時的窮乏状況への対処についても女性の目から見た地域の生活の基本データの調査が不可欠である。

c．自給用資源と換金用資源の併存

この資源リストには、コーヒーやカカオといった換金を目的とした資源がリストアップされている。プランテーションのように大規模生産をしているわけではなく、住居の周囲に数本、あるいは十数本植えてあり、必要に応じてローカルマーケットで換金している。

フィリピン政府はコーヒーの輸入を制限して国産のコーヒーの使用を義務づけている政策をとっているといわれ、農家の庭先にまばらに植えられている。

カカオは、果実のまま販売するのではなくチョコレート状に加工してローカルマーケットで販売する。これを tabliya といい、温めたミルクを加えてチョコレート・ドリンクにして飲む。tabliya の加工は、比較的簡単で、カカオの果実をとりだし、その中の種子を数日間、乾燥させておく。それを大きな鍋で炒り、薄皮をむいて集め、ヘラでつぶして練り、チョコレートをつくる。tabliya を corella のローカル・マーケットで販売すると結構の金額で売れている。もっぱら子どもたちの教育費になるようである。

換金的な役割をする示す資源としてコーヒー、tabliya の他に salago(siapo,46)という林産品がある。これは、ジーパンのデニム加工の材料であり、また、和紙でつくるお札の原材料として日本にも輸出されているという。雑木林の鬱蒼とした林の中にも貴重な換金資源がある。ラタンである。現地では uway と呼ばれ、その価格が高いために、貴重な換金財として地域の人びとは重視している。マホガニーやジュムリナといった家具や建材に使用されている樹種は多くの場合、林業として生産されており、面積的には広くないが、

単一種で樹林を構成する林地を形成しているが、ラタンは雑木林の中をはえずり回っている。ラタン(籐)は家具財ばかりでなく、ラタンの管の中に汚染されていない水が蓄えられており、兵隊の行軍中の飲料であったり、乳幼児の飲料に用いられたりする。

現金が必要になったときに、その金額規模に応じてこれらの地域資源が使い分けられている。しかも、以上のように地域固有の資源が暮らしと共存していることに注目したい。

d．料理等の暮らしに変化を与える資源の存在

この資源リストには、achute(37)、sili(32)、luy-a(33)、tanglao(38)、balililid(39)といった着色料や香辛料などがリストアップされている。achute は、食紅で、料理などで材料を赤く色をつけるときに使用する。この葉は、女性特有の冷え症にきく薬草としても用いられている。葉を火にあぶり温めてお腹に巻くのがその使用法である。sili は、赤トウガラシで、香辛料であるが、これ以外に乳児のシャンプーとして葉を乾燥したものを水に溶かして使用する。葉は野菜としても食する。luy-a はショウガの一種である。暮らしで用いる方法は香辛料ばかりではなく、胃腸薬としても使用される。tanglao は、レモングラスの一種で、citoronella plant として呼ばれている。香辛料ばかりではなくこれもシャンプーとして利用されている。balilikid は、フィリピンの農家の料理には欠かせない香辛料である。香に独特の特徴がある。

このように赤トウガラシやショウガは、栽培しているが、achute や tanglao、balililid は、使いやすいように森から採取して移植している。これらの地域資源は量的には、少ないが、独特の料理をつくりだし、地域の暮らしに固有性を付与する役割をもっている。いわゆる郷土らしさ豊富な料理をかたちづくる必需品である。

e．薬草として用いる植物

地域の農林産物資源は、単なる食料ばかりでなく、多用途な用い方をしており、その中にこれまでにいくつかの薬草としての利用をあげた。 tog-tog や herba は、庭や畑地の隅に植込まれている薬草の一部である。tog-tog は、乳幼児の夜泣きのときに煎じて飲ませる薬草である。herba は、ヨモギの一種で、中耳炎のとき主に用いられているが、万能薬のように用いられ、発熱したときは身体に液汁を塗って用いたりもする。

医療機関が近くになく、特に乳幼児を育てている母親にとっては急な発熱や夜泣きなどに対処する方法を用意しておかなくてはならない。この資源リストをみても女性ならではの配慮がうかがえる。インフォーマントは、もう子どもは育て上げており、この家の庭には薬草類が見られないが、乳幼児をもつ家では母親が森などの雑木林から必要な薬草類を採取し、庭に移植していることが普通であるという。

f．住生活等に用いる森林資源とマキ

地域の農林水産資源の利活用は、食生活だけではない。住宅の建て替えや修理などに用いる建築材や家具材についても自ら供給できるようにボホール島の暮らしはでき上がっている。インフォーマントの屋敷地の近くには、本数で40～50本のマホガニー(43)の林地が用意されている。現在の住居の用材も自家林から調達している(写真43、44　参照)。現在使用している丸テーブルや飾り棚は自宅の林地の用材を近傍の木工所に運び、つくってもらったものである。

マホガニーの他にジュムリナ(42)がある。家具材、建築用材として使用されるが、マホガニーよりも成育期間が短く換金には適しているという。同島のサグバヤン・ミュニシパリティの知事は、ジュムリナの単一造林をしており、日本に販売したいと語っていた（写真45　参照）。

料理に使う燃料は、マホガニーやジュムリナの枝などを使用するが、多くの場合、様々なものからマキをひねり出すといった方が当を得ている。ココナッツの外殻を乾燥させてそれから炭をつくるカマドが見掛けられた。ココナッツの古い枝もよい燃料である。燃料用のマキには、ipil-ipil（別名、santaelena ）という丈に低い木が用いられているという。この木はハゲ山の造林にもよく使われ、表土を被覆し、kugon という草の除草の役目も果たす。ipilという堅く、樹高の高い常緑性の木があるが、これとは別種であるという。

g．伝統的な農耕具と資源

伝統的な農耕用の用具が使用されている。「掘り棒」(49)は、ubi や arrow root といった根栽作物類(root crop)を掘るのに使用される。また、バナナ等の幹を利用して臼をつくったり、マホガニー等の堅い木を用いて杵をつくったりする。ボホール島の都市、タグビララン ではコテやショベルなど掘り返す鉄製の道具が販売されているのを見るが、伝統的な地域資源を利活用した道具の使用があり、これらの用途や効率性を見直して土着の技術の位置づけが検討される必要がある。

(4)　地域資源の分布、その維持と活用

a．インフォーマントの位置づけ

今回のインフォーマントは、地域の生活改善グループのリーダーであったり、サリサリストアの経営主であったりするために経済的な階層では中位以上の生活を営む人びとであった。このクラスの人びとは、貧困層の生活向上のターゲットモデルということができる。抽象的な数値目標よりも具体的な地域の人びとがイメージを抱ける生活向上の目標が必要である。都市生活や地主階層の暮らしを生活向上の目標にするのは適当ではない。達成しうる目標としての具体的な生活の総体として今回の対象となったインフォーマントの社会

Image of Ms.Adolpa Apale's Land Use

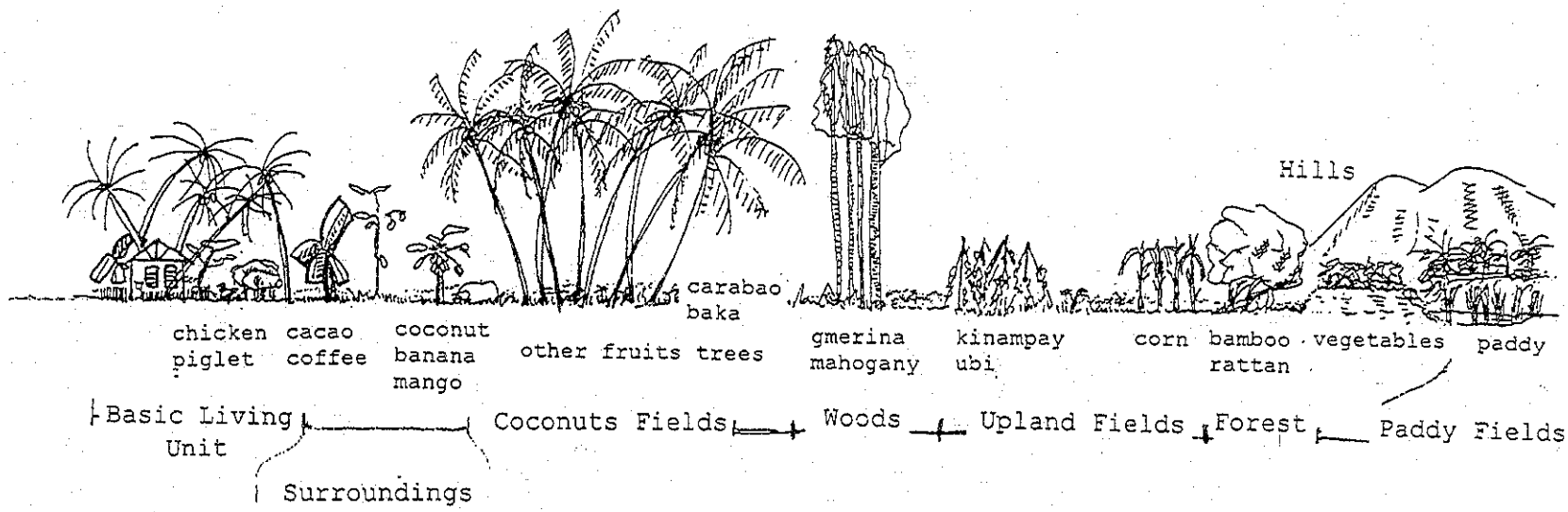


図３・６・７ Image of Ms.Adolfa Apale's Land Use

階層は十分にこの役割を果たすものであり、特に資源を利活用した生活が他者でも理解ができるインフォーマントであるといえよう。

b．暮らしからみた土地利用の特徴と生活型農林業の存在

インフォーマントの居住する地域の土地利用は、一見しただけでは、雑然とした緑の空間が広がるのみであり、商業的な作物生産を展開する農業開発の適地としてみることも可能であろう。粗放的な土地利用と受け取られ、開発の必要性の大きな根拠となることも想像がつく。しかしながら、インフォーマントに指示されて記録をとりはじめると、何等かの形ちでほとんどの地域資源が、暮らしに位置づけられ利活用されていることが判明した（図３・６・７）。カナブナパンのインフォーマントの住居の周りには、バナナ、ココナッツ、グゥァバ、グゥャバノなど果実類が豊富に植えられランの花や石楠花など花木が植込まれ、色とりどりの花が花壇に移植され(写真52～54　参照)、一方、サンビセンテ＝ノルテのインフォーマントの庭にはランやタロ芋、バナナ、多種の果樹、コーヒーなど多くの資源が同様に植込まれている他に闘鶏舎が多くの面積を占めている(写真55～57　参照)など居住者の生活に対する考え方や価値観というものが示されているいってよいだろう。野菜畑は、住居からかなり離れた距離のところにあり、その途中には、豚や鶏の家畜舎、ココナッツ林、雑木林地、そして畑地が連なる。住居から最も遠い小河川の水管理がしやすいところに水田が位置している。

土地の所有形態、バランガイ全体の土地利用状況などのデータが必要であるが、これだけのデータでもこの地域の暮らしに必要な資源の分布や土地利用の方法が判明する。そしてこれらの資源の利活用によって地域の生活が維持され、持続してきていることを物語っている。このようなデータから地域にすむ人びとが、どのような考え方をもって暮らしを維持してきたのか、これからどのように維持していくのかについて他者も知ることができる。また、これらの独自ともいうべき暮らしの仕方は、最善の技術によって組み立てられているわけでもない。地域での暮らし方の見取図があり、農林業の組み立て方が存在する。

c．生活型農林業による開発方式

これらの自らの暮らしを維持する自給的農業では、非常に多種類のものが少量ずつ生産されていることが特徴である。そしてこれらの自給的な資源確保は女性が中心になって維持してきた方式であり、これまで地域の生命を支えてきたものである。暮らしには非常に多種多様な資源が必要であり、それを組合わせて地域独自の暮らし方を形成する。また、地域だけでは存立せず、経済市場の有無如何にかかわらず、周辺の他の地域社会との物的な交換を含むコミュニケーションがなされてきたのである(写真16～21　参照)。また、これらの自給的諸活動の営みは地域の自然的な環境をそのまま利活用した形態をとっているため、地域の資源と環境とに馴染みやすい関係にあることが予想される。地域が、今後も

このような条件の中で生活を持続していくためには、所得の創出方途と現在の生活維持の方途が有機的な連携をとることが重要である。新しく導入される技術と現存する技術が併存し、相互の利点をいかしていく開発が必要である。これらを支える既存のローカルマーケットシステムを含めて、総合的な開発プログラムが必要になってくる。これには、既存資源の利活用とそれを支える技術、その改良、地域の生活を支える多品種少量生産の農業技術の改善、これらの中から所得創出を意識したポストハーベスト技術、既存の資源活用に伴う環境維持活動の組合わせといった総合的な内容になってくる。これら一連の農林業開発の仕方は「生活型農林業による開発方式」と称することができ、その主体は女性が中心になって男性の協力をえたジェンダー方式の開発である(写真58～60　参照)。

注

1) National Statistic Office in corporation with National Commission on the Role of Filipino Women,1992,STATISTICS ON THE FILIPINO WOMEN
2) 前掲書、p.17 3) 前掲書、p.17
4) 前掲書、p.11
5) 前掲書、p.14
6) 前掲書、p.15
7) 前掲書、p.23
8) 前掲書、p.23
9) 前掲書、p.25
10) 前掲書、p.25
11) 前掲書、P.28
12) 前掲書、p.36
13) 前掲書、p.36
14) 前掲書、p.37
15) 言語的には134グループに分けられ、方言差を含めると185の言語グループがあるとされる。全体で80位上の民族があり、そのなかに約60程度の少数民族が含まれている。これを伝統的な土着宗教とイスラム教、キリスト教で区分することができるという(合田涛、1983、「民族と言語」、綾部恒男・永積昭編『もっと知りたい　フィリピン』、弘文堂所収)。
16) ＵＮＩＦＥＭの報告書によれば、「65世帯のうち、20世帯は元からのバランガイに住んでいるが、45世帯は農場のなかに住んでいる。水田とココナツ農場の大部分は、町に住む一握りの富裕なファミリーによって所有され、その資産を約50の小作農が管理している。マンギリオールでは25世帯だけが小区画の農地を所有しており、主な作物として米、ココナツ、アロールート、果樹、野菜とりわけパトラを栽培している。」

と記されていており、我々の聞き取り結果と若干数字が異なる。

17) 「Province of Marinduque / 1994 PROVINCIAL INTEGRATED AGRICULTURAL DEVELOPMENT PROGRAM」によれば、ガサンのミュニシパリティ全体の作付け面積は4,621.25haで、その内訳は、米（潅漑田 128ha、天水田 377ha、高地［陸稲］107ha）、トウモロコシ 60ha、ココナツ 4,719ha、果樹 48ha、バナナ 64ha、野菜 40ha、根茎作物 40ha、飲料用（コーヒー／カカオ） 6.25ha、マメ科（ Mungo［アズキの一種］、ピーナッツ、Sitao ）32ha。家畜の頭数は、牛 195頭、水牛 1,990頭、馬 355頭、豚 2,820匹、ヤギ 600匹、鶏13,225羽、アヒル 485羽である。また、マリンドゥケ州全体の米の自給率は、ほぼ50％である。

18) ガンタ（ganta）は、穀物・豆類の容量単位。スペイン度量衡の影響が残る伝統的度量衡単位で、サロップ(salop)と呼ばれる木製方形桝１杯分が１ガンタで、３リットルを標準とする。アロールート粉の場合、約２kgに相当する。なお、１カバン(kaban)はサロップ25杯分で、75リットル。

19) the poblacion 役場、教会、学校などが集まるミュニシパリティの中心地

20) フィリピンの学校教育は６－４－４制をとっている。６年間の初等教育は４年の小学校(primary school)と２年の高等小学校(elementary school)に分れている。中等教育は４年制の高等学校(high school)で行なわれ、職業過程はほとんどない。高等教育は４年制の大学が主で、一部２年制の短大もある。職業教育は大学が中心になって行なっている。

［参考資料］

１．ＵＮＩＦＥＭ「農村女性による根茎作物の生産、加工、販売プロジェクトのモニタリング」(MONITORING OF PROJECT (PHI/88/W01), PRODUCTION, PROCESSING AND MARKETING OF ROOT CROPS BY RURAL WOMEN)

２．マリンドゥケ州「1994年州総合農業開発プログラム」(1994 PROVINCIAL INTEGRATED AGRICULTURAL DEVELOPMENT PROGRAM Province of Marinduque)

３．マリンドゥケ州ボアク郡「社会経済プロフィール」
(PROVINCE OF MARINDUQUE MUNICIPALITY OF BOAC SOCIO ECONOMIC PROFILE ALEJANDRRO B.SOLOMON MUNICIPAL MAYOR)

４．「ボホール州プロフィール」
(BOHOL PROVINCIAL PROFILE)

５．「ボホール州サグバヤン郡サン・ヴィセンテ・ノルテ村についてのＲＲＡチーム報告」
(RRA TEAM REPORT FOR SAN VICENTE NORTE, SAGBAYAN, BOHOL)

Ⅳ　援助協力の基本方向

農村開発の分野において、農業生産のみならず農村生活全般の向上を含めた農村開発の必要性が問われて久しい年月がたっている。1991年に開始されたこの「農村生活改善のための女性の技術向上基礎調査」とこれに先行した「マレーシア／スリ・ランカ国農村生活水準向上計画基準基礎調査」から多くの先進的な事例をこの間学んだ。ＥＳＣＡＰやＦＡＯといった国連専門機関やスウェーデンやノルウェー、カナダなどの優れた試みや経験があることをこの調査を通じて知ることができた。

この分野では、特に女性の参加を中心とする自らが改善し、向上していくための方法が必須の条件となってきている。この分野においてどのような方法が具体的に考えられるか、これまでの調査を踏まえて具体的な開発方法の方向をここでは検討することにする。

１．本調査の目的

1975年、国連はこの年を「国際婦人年」としてこれまで開発の外側におかれていた女性たちをメインストリームに引き出すように、世界で初めて、メキシコシティーで女性代表者会議が開催された。先進国も途上国もそれぞれ課題を設定してそれぞれが努力をすることが確認され、10年後には、アフリカのケニアの首都、ナイロビでその結果と問題点が検討された。

女性たちだけに焦点があてられた開発プログラムでは、実際的な生活を全力で支えてきた女性にさらに多くの負担を背負わせることになることが判明したのもナイロビ大会であった。そして、世界中の女性たちが支えてきた実質的な生活面が表に引きづりだされ、そのことについて男性の理解が非常に不十分であることも判明してきた。女性への開発の効果としての所得の配分も一層必要になるが、さらに女性が主に担当させられてきた家事や育児といった生活面のさらなる負担の軽減とこの面への男性の理解のみならず積極的な参加の必要性があることが問題視されるようになってきた。開発過程に女性が参加するいわゆるＷＩＤ（ Women In Development ）から、ＧＡＤ（ Gender And Development ）の考え方が提示され、女性だけではなく男性も女性がこれまで推し進めてきた実質的な生活場面に参加してよりよい暮らしや社会を創造して行くことの重要性が強調されるようになってきた。

女性が主に担当させられてきた生活分野の状況が把握できるデータはきわめて少ないの現状である。生活の場は、多くの価値が遭遇してあるときは激しい衝突が生じ、あるときは巧妙な駆け引きの場となる価値創造の場であるといってもよい。世界の様々な個性豊かな文化の源泉が生活の場である。男はどのようにふるまい女はどのように行動す

るのかが決められ、それを子供たちが習得していくという教育の過程でもある。

男女の役割も主にこの生活の場で形成され、維持され、修正されて社会的な価値をつくりだしていく。その意味で男女の役割分担は先天的な生物学的な要因によって決定されるというよりも多くは後天的で、社会的、文化的な所産物ということができる。前者をセックス(sex)という用語で代表させ、後者を前者と明確に区別するものとしてジェンダー(Gender)という概念が提案された。この用語が一般化したのは、最近のことである。

ジェンダーという概念は、個別文化の主体的な意味を尊重することを前提としてそれぞれの文化の中での男女の社会的役割を理解し、開発をふくむ社会変化に伴って要求される、より適正な男女の役割分担の形ちに改善し、新たな男女の社会関係を形成しうる可能性を意味する概念である。言い換えれば男女の役割分担の理解を個別文化のコンテキストの中で理解をしたり、分析をするという面と積極的によりよいものに改善し、創造していくという運動的側面ももっている概念であるということができる。

ジェンダー概念を用いたフィールドワークが行なわれるようになり、これまで男性が食料供給を行なっていたと理解されてきた多くの狩猟採集社会での再調査で、狩猟採集民の主食が、多品目に渡る植物と昆虫や小動物によって構成されているのが、判明してきた。大型動物の狩猟は、食料としての貢献度が低く、なおかつ食料の多くを女性が中心となって獲得するという労働時間量的な調査結果が見いだされる等、生態人類学、経済人類学的な調査結果が得られるようになってきた。女性がこのような実質的な生活、経済人類学的にいうならば実在経済の姿が女性を中心に担われてきたと同時に、形式的な経済を実質的に支えている姿がより明瞭になってきた。

また、この分野の女性専門家による開発参与した地域の女性の克明な暮らしの民族誌的な報告も発表されるようになってきた。ケニアの女性たちの暮らしと開発の関わりを克明につづったジーン・デイビソンの『ムティラからの声―ギクユ族農村女性の暮らし』(1989)やアウト・ターレが表した『損をした女性たち―マサイ族の牧畜の変化とジェンダー関係における女性の資産』(1988)は英国とスウェーデンから出版されたいずれも女性の研究者によるフィールドワークの結果である。

本調査では、以上のような最近の成果を前提により実質的な生活の改善と改良を開発に加えていく新しい考え方にもとづく方法を構築する資料をつくることにある。より具体的には以下の2点がさしあたりの目標である。

(1) 途上国の開発における女性の役割とニーズの把握をすること
(2) 開発への女性の積極的な参加を図ること

途上国の農業・農村開発における女性の役割がどのようなものであるのか、また、開発に際して女性はどのようなニーズの持っているのかについてのデータは、短期のこの